金剛石の原野

長田秋濤譯

82
33

秋濤氏大業越の一にして西比利亞
歳古於て之と相前後して發傳すべきものな
り、黄金世界とは果して何處ぞ、これ世人の
耳朶を聳動したるトランスバアル共和國なり。
金の產出地として、富貴なる小共和國として、
將又大英國の鞭鞭を敵として、刀折れ矢盡る
迄も戰はんとする此勇壯なる國民を
生ぜし地は炳々火を見る如く本
書によりて明らかなり。

82-224

秋濤兄、

兄頃者又所謂十二大奇書を譯し逐次刊行し世に問ふ兄亦所謂文士に等身の多きを致し新聞雜誌又當に著せざるなし、兄がメシヨンのパイプはどの捉を捻り惚けたる面をして世間に駄法螺を吹き廻る中に陸續此等の僕は先づ兄の勉強に驚かざるを得ず、

六、

兄も亦中々の横着者かな、然れども此れ兄の兄たる所以なり、僕は今の所謂文士の淺陋偏窟を嫌ふ、門を杜ち世と絶ち婦女子一讃の小天地に得々す、既に修

巻なく加ふるに惰を以てす、識見陋隘觀察淺薄其の描く所のもの、千篇一律局面偏小、士君子の梧右に價せざる毫も怪むに足らず、活世界の文士是の如く偏陋なるべからざるなり、兄能く之を知て善く勉め善く交る、必ず他日の大成を期するものあらん、僕の兄に於ける亦處世其の道を異にし雅俗相分るといへども常に爾汝の交りをなし、知て言はざる無く言て盡さゞる無く置酒高論次ぐに嘲罵を以てす、細君の其の後に擇するを知らず、一種契合する所あればなり、此の所謂十二大奇書固より未だ兄の爲に喋々するに足らずと雖も、若目甚だ好く、島國青年の眼を惹きて世界の大處に注がしむ、一片海嬬の書と夐かに選を異にす、僕は兄の一親友として兄に望む、今の勉強に加ふるに益々修養の工夫を積み、著に譯に大に文壇に貢献する所あらんことを、文士の品位其の人に存す、天下の活文士となり、天下の活豪傑と交り、天下の活文字を著す、亦人生の一大活事業に非すや、區々の事業兄の爲に取らず、會十二大奇書の既刊一二冊を讀み是に於て乎言ふ多罪

明治三十三年六月初旬　林田亀太郎

長田秋濤兄

長田秋濤譯

●世界一不思議　既刊
●西伯利亞蒙古旅行　仝
●金剛石の原野　仝
●サハラ大沙漠　仝
●ヌガミ湖探險　仝
●ヒマラヤ探險　仝
●西部亞弗利加探險　仝
●北氷洋　仝
●極北岬　仝
●墨西哥旅行　仝
●印度紀行　近刊
●パナマ紀行　仝

金剛石の原野

第一卷　金剛石の原野

長田秋濤譯述

第一章

一

千八百六十二年二十二日ケープを出發してより、航海中種々珍事に遭遇した後、彼の金剛石發見の爲、其名を天下に著かしたグリツカランドに到着した。閑暇で又富んでゐる人は、此樂土に來て或は牛車に乘り或は徒步して、一粒千萬金の材料を求むるに汲々せぬ者はない。

で其實地に臨んで該地の跋涉も出來ず、金剛石又は黃金の堆きを耳にして居る者は日々新紙を披いて其發見額の倍々上るのに驚駭するのみである。

長田秋濤譯述

●世界一不思議　四月刊行
●百日間世界一周　金港堂
●金剛石の原野　同
●ツバメ　同
●ミヤコ鳥　同
●世界一周　同
●北海道　同
●極北　同
●最西部旅行　同
●印度紀行　同
●バナマ紀行　同

金剛石の原野

長田秋濤譯述

第一卷　金剛石の原野

第一章

（一）

一千八百……六月二十二日ケープを出發してより、航海中種々珍事に遭遇した後、彼の金剛石發見の爲、其名を天下に轟かした、グリッカランドに到着した。閑暇で又富んでゐる人は、此樂土に來て或は牛車に乘り或は徒歩して一粒千萬金の材料を求むるに汲々せぬ者はない。で其實地に臨んで該地の跋渉も出來ず、金剛石又は黄金の堆きを耳にして居る者は日々新紙を披いて其發見額の倍々上るのに垂涎するのみである。

軍隊の司令長官も船長も警察官も商業家も農業家も此地に來れば、其配下の逃走せぬやう、充分注意をしないと配下等は直ちに去つて北金鑛又は富源のある所に身を投ずる始末で充分の警戒を加へないと安全に其職業を發達せしむる事は難しいのである。此無限の富源を有する場所への街道は、車に如何なる者が住居して居るかといふと、それ等は或一定の職業を抛つて逃走して來た兵士水兵の成れの果と、或は商業家の手代、丁稚等の團体と云ふやうなもので、千二百吉羅米突以上の行路を難しとせず、無人の境を經過して此地に來たのである。これには少くとも二十日より三十日に渡る大旅行をしなければならぬ。日中は太陽の光が激しいから、夜間を進行の期とするので、其がため、或は沙漠の中に迷ひ、或は飢え或は渇し、遂に其生命を失ふ者も少からず、此邊を旅行すると諸所に骸骨の横はつてゐるのは此がためである。

予は乘合馬車に一座を占めんと決心した。ウエリングトンよりは毎週出立するが此度は七月十三日木曜日でないと、乘合馬車が發しないと云ふので餘儀なくシーポアンと稱する海邊の某氏の別莊に十五日以上を過すことになつた。此地は後に三千ピューの山を控へた絶景の地で、十五日は愚か一月、二月の歳月を經過するには殆ど徒然を感じない。愈よ其出發の日になつてウエリングトンまでの汽車に乘つた。此時分は是より先には汽車がない。汽車を降りて予はインランド、トランスポート、コンパニー（内地運輸會社）の馬車に宛も荷物同樣に載せ込まれた。八頭の馬で曳かれるのであるが、其馬車の粗造で狹いと言つたら殆ど身動も出來ぬ位である。十二日の餘も此中に居なければならぬ。加之是から先きの道は岩又は凹凸が多くて動搖が甚だしいから身體を疲らすこと非常である。併し景色は頗る佳い。ウエリングトンを出立して、凡そ三時間の後ち初めて猿群に遭遇した

が我々の馬車を見て喧騒を極め、或は木に攀ぢ或は岩石に登る樣は、初めて見る眼には、珍しくも面白く感じた。是からペンスクルーフと稱する嶺を越えて夕刻の七時頃にセレーと稱する小村に到着した。此處には小い奇麗な宿舍もあるし、又食腦に上る物などもなか〳〵闊迦の仕方が高尚である。此宿舍の持主はサクソン人であつて、ベルグマンと呼ぶ人であつた。

翌十四日早朝此地を出發して六時リユーウエンホンタインの宿場で珈琲を飲み、勇氣を付けてホッテントットの嶺を越えて、海面を離るゝ三千ピエーなるカルヽーの野原に着いたが、此處には唯だ赤色を帶びた土と小さい荆棘が繁つて居るばかりである。十一時汚い小屋で晝餐を喫してから、バタ、スリバーの惨な旅店に到着して土間へ蓆を敷いて其上で睡眠を貪つた。

十五日午後ビユフアローを越えて、ウエルドの曠原に着いた。此曠原

はカルヽーに續いて居る所で、予は一首するを忘れたが、此クープより來る大街道には三リユー毎に休憩所が設けてあつて、馬匹に食料を與へ、又休ませる事が出來るやうになつて居るから、四十八時間は其處に停ることが出來る。若し其時間外に此地に居ると、稅を拂はせる規則に定つて居るが併し實行することはないやうに見受けられる。此邊に來て最も不便を感ずるのは夜になつて馬が何處へか奔逸して了ふ事で之を捕ふるに日時を空しく費すやうな事が往々ある。日が全く暮れた時分に耶蘇に損所が出來たから、ボエルス人の百姓家を叩いて一夜の宿を求めやうとしたけれど如何ほど戸を叩いても開えぬ爲をして起きない、餘儀なく假修繕を爲して進むことになつた。

彌々此處を出發するに先つて、餘り輕率であるから何か復讐をしやうと云ふので、此百姓家の門前で最も騷がしき音をさせ彼等が平然と睡つて居られないやうにして遁らうと云ふ事になつた。然るに同行者

の一人で、最も能く此ボエルスの風俗習慣を知つて居る者が頻に之を止めて云ふには、是等の粗暴なる人間は射擊術に長けて居るから、如何なる事を仕出來かすかも知れぬ。然う云ふとは聞めたが宜からうと誡めたから我々は無事に此地を出發する事になつた夜半ブラッドホンタインと稱する地に到着したが此處には雨露を凌ぐ小家がある。で、而も其小家の周圍には獸類の糞尿、又は骨などが堆く散在して居る予は彼宵睡られなかつた。

七月十六日、日曜日。我々は金剛石の原野に來る車を待つて居た。是は此處で乘り換へる規則で爲に終日此地に居つた。漸く午後五時頃到着したから直ちに乘り換へて悠々と進み初めたが道は以前と變らず危險である、從つて激烈なる動搖を感じた。午後八時頃闇夜に一點の燈光を認めたから、それを辿つて其處に到着して見ると、豈圖らんや是は家にあらずして洋燈を點けたる一の小さな車である、餘儀なく夜中道を辿つたが朝の四時より六時頃になると寒さは骨身に徹して堪えられない。止むなく車を止めて日出まで毛布を被つて睡を貪つた、九時ウィトキックと稱する所に着いた。此所で朝餐を喫して再び出發した。

是よりは花は無論一樹の影も見ず、又一蹤の草もない。唯だ滿目砂漠たる沙漠で、偶に此邊で斃れた者の骨を見る位に止つて居る。

（二）

出發してより五日目となつたが、予は最早疲勞の極殆ど旅行する勇氣も盡き果た。午後十一時ポールと稱する小村に着いたが、此處に於て初めて寢臺の上に横臥する事が出來たので非常に愉快を感じたのである。

十八日午後此單調な街道を辿んで漸く或富豪なる英國人の畑の所に

來た、此地には一萬頭以上の羊、カーフル及びホッヘン、トットの僕婢などが居て、其中には三人の若い娘が居た。此娘等は最も能く教育されて居て食事の後、予にピヤノを演ずる事を請求し、鍵踏などを演り初めたので圖らず心を慰める事が出來た。此夜の事は予の最も能憶に存して居る事である。翌日は彌々出發しなければならない、夜半彼等に暇乞をして立去る事になつた。

十九日、水曜日。寒氣激烈のため馬車中に睡る事が悔はない。（曉に於て列氏の七度）漸くヴィクトリア、ウェストと稱する、近頃建てられた地に到着したが、此處は商賣も隨分繁昌して居る樣子である。此村の近傍に二三の黑奴の小家を見たが、其黑奴はクリッカ人で白人種と混同する事を禁じられて居るのである、午後三時風は砂塵を捲いて殆ど咫尺を辨ぜざる中を衝いて出發した。午後六時晩餐を喫したが此家は百姓家であるが我々は懇篤な待遇を受けた。午前二時再び出發し

たが又曉に至るまで殆ど睡る事が出來なかつた。

二十日、木曜日。朝七時ポエルス人の家に車を止めた。此人は三千頭以上の羊を飼養して居るにも拘らず生活の質素なるには驚いた。砂糖もない一杯の珈琲を出して三片の代を拂はした程の强慾者である。八時四十分馬を換へて出發したがポーホールに於て充分の修繕をしなかつた爲此所に至つて車軸は再び折れ如何ともする事が出來ない殊に闇夜で何處へ行つて宜いか見當が付かぬ。餘儀なく徐々進んだが動搖は一層甚しくして、頭を打つ事も屢々である。此車中の同行者は英吉利人と二人の亞米利加人と三人の獨逸人及び予で、外に一人の英國婦人が居たが、漸く午前四時頃になつて夜も明け車を止めることが出來た此夜は寸時も睡られないで終つた。

二十一日、金曜日。西伯利亞の內地にでも來たやうで寒さの劇しいと云ふのはない。此日車の輪鐵は壞れて了つた。全然破壞の極に達

したのである。又ヴィクトリアから連れて來た馬は砂が深い所爲で進行が遲い。取者は頻に鞭撻した結果此二頭の馬は力盡きて倒れて了つた。餘儀なく之を捨て他の馬を雇ふて來て出發しなければならない。此日は車より降りて殆ど十四ミルばかりの所を步行し、午後六時に至つて或富豪の地主の家に到着して北處に於て晩餐を喫した、夜十時半再び出發したが是が第四晩目の睡らざる晩である。

二十二日、土曜日午前八時頃ホープタウンに到着した。予は疲勞の極半は死人の如くなつてホテルの寢臺の上に身を投げたが、此ホテルは非常に騷がしくして睡る事が出來ない。衾を蹴立つて此處を出發し四時頃にオレンヂ河を過ぎた。河の向岸は即ちオレンヂ自由國で、此河が國境となつて居る。車軸は勿論輪鐵が折れたのみならず他に損所が出來たので或ボエルス人の家で木片を請求したが承諾しない爲に進む事が出來ない。其夜は晩餐も食せず星の光の下に一夜を明す

ことになつた。

廿三日、日曜日。日の出ると共に出發した。此邊の原野は見る物はないが一體に沃土で進むに隨つて風景が變つて來た。諸所に野花の咲き亂れて居るのはなか〳〵面白い。駝鳥を飼養して居る所があつたが是は此邊の最も重もなる生業である。此事に就ては他日詳述する事があるであらう。水流は潺々として清く、空氣は新鮮で之を吸ふ心持の好いといふのはない。午後四時富豪なるボエルス人の家で晩餐を喫したが此人は地主であると云ふ事で。此邊よりして金剛石の原野となるのである。此農夫の談話に依れば十年以前即ち此金剛石原野を發見する以前の事であつたが、我所有地に於て鷄卵大の奇麗な石を得た事がある、夜になると太陽の如き光を放つた暫くの間小兒等が之を玩んで居たが或日の事着物を洗濯する時分に何處へか亡くして了つた若それが今日存つたならば百萬法以上の價値のものである

と云ふので頭に歎息してゐた。此處を發して進む途中に於て非常に大きい蛇の横はつて居るのを見た此夜はボエルス人の家に宿泊したが床は石の如く硬いが車中に睡るよりは遙に安全である。

二十四日、月曜日。午前十時頃出發したが景色は彌々麗しく午後三時頃田園のある所に到着した、北整頓してゐるには驚いた。加ふるに其田園中に建てられた家に入ると、獨逸の本などは總て揃つて居て一の書籍部を爲して居る、此主人はラドロフと云ふリューベックの人であつて、非常に咨つた晩餐を饗したが我々は實に日頃の飢えた腸を適すことが出來た。四時半此人に暇乞をして此處を出立し三時間の後目的地なるプニエルに到着した。此處はワールと稱する河畔にある町で、金剛石州の中心である。ローヤルアゾニックホテルに到着した。

第二章

(一)

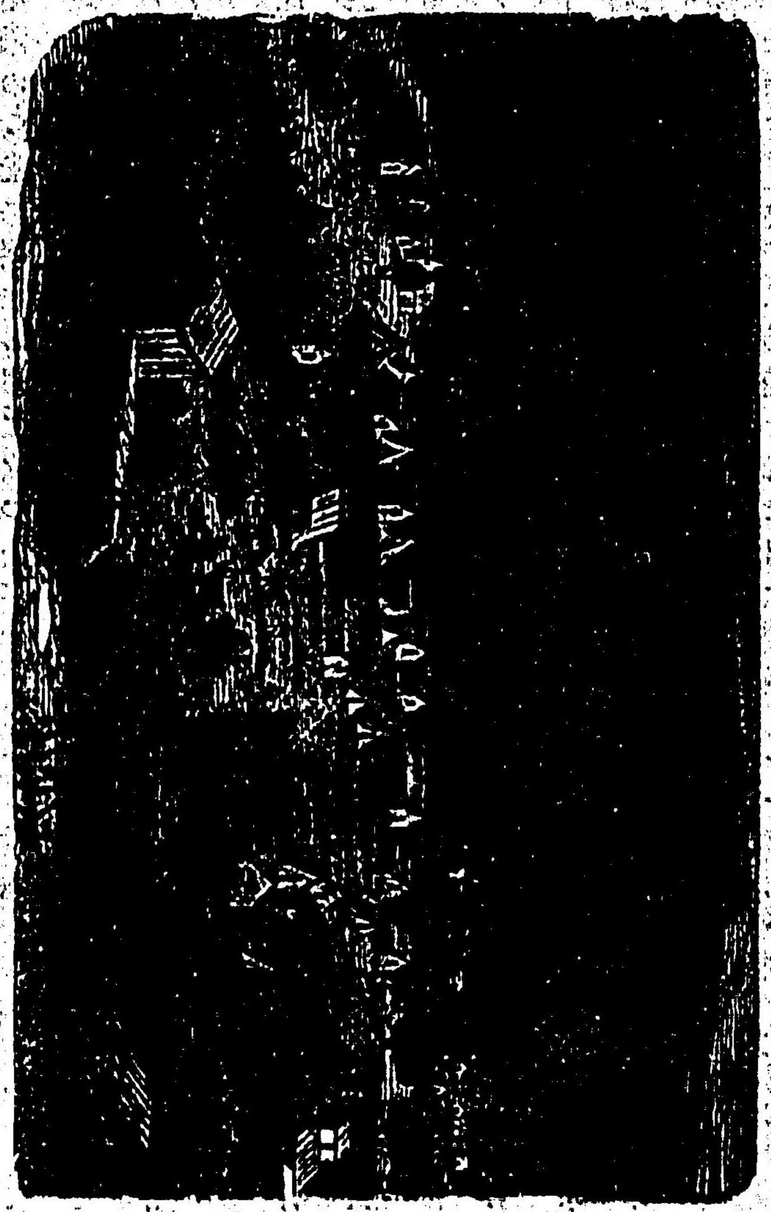
プニエルは極めて新しい町で、予が該地へ往きし時は建てられてから一年ばかりの後であつたが家と云ふものはなく、天幕或は板圍ひ、或は英國米國等より持つて來た鐵製の小屋又は黑奴の小屋などが宛も繰日の小屋掛けの如くに建てられてあるのがワール河畔に臨んで居る。此近傍には金剛石を發掘する爲め、諸所方々に穴がある、中には隨分大きいのもある又漸く二三尺しかないのもある、散策者などは此穴に陷る事があるから夜になつては此邊を歩かないが宜いと云ふ事である。各區とも先づ三十ピエー四方の大きさで四方は大きな石を以て壁を作られてある、而して各區に六個の水桶が具へてある。是は土を袋に入れて來て此水桶の中で振り動かし土と小石とを分離させるや

うになつて居る、是が濟むと河の岸に持さつてグレードルと云ふものに掛ける此グレードルと云ふのは器械の名で、此處で大小の石を分ける。其處には種々に機械があつて第一に鷄卵大の石ばかりを撰み、第二には之に次いだ石を撰び、第三には豌豆大の小石を撰ぶやうになつて居る、最後には之を大きな机に載せて刮具を以て金剛石を撰り出すのである。千八百六十七年の事であつたが一人のボエルス人のサヤミツプと云ふ者の畑即ちオレンヂ河畔ポードタウンの西方十七リユーの所アルパニヤ州に於て、初めて金剛石が發見されたのである。一人の駝鳥の獵者と二人の貿易者が此邊を通つた時、小兒等が透明にして光わる小石を持つて遊んで居るを見受けたのでオレイーと呼ぶ一人が豫て聖典で讀んだ寶石に遊ひないと云ふ漠然たる考を以て、偖かな物と交換を求めた。小供は悅んで之を諾した。彼はコレスベルヒに到着してから此始末を同業者に話して之を試驗しやうといふので

其石でホタルの窓を切らうとした。外の人等は見慣に等しいと冷笑して此石を捨さしめんとした位である。然し幸に之を持つて居て、グラハムスタンに往つた時、此地に居た有名なアザーストン及リカードと稱する學者に試驗を請ふた。果して二十二カラット半の重量を有する金剛石であると云ふ事が解つた。之を聞いた殖民地總督ファリツプ、ウードハウス氏は、直ちに五百磅を以て買入れて了つた。オレイは圖らざる利益を得て再びサヤミツプの家を訪れた所復た一の金剛石を得たが九カラットの金剛石で今度も總督が二百磅ばかりで買取つた。此評判が土民等の中に起つて白皙人種は石を珍重すると云ふ所から彼等はオレンヂ河畔を彷徨ふて石の探索を初めた。果して數週の後に十個の金剛石を發見した。評判は倍々高くなつて、千八百六十八年に到つては聞き付けてナニエル、ツール河畔にまで人が集つて來た。是こそ彼の南方亞弗利加の最とも稱すべき有名なる金剛石

をカーフル人のスワールボーイが發見した時である。其金剛石は八十三カラット半であつて、倫敦の王室に關係ある寶石製造ハント會社が之を一萬千五百磅で買收した。

段々金剛石を得やうとする者は殖えて來たが、殊にボエルス人の如きは此金剛石州に入込んで來た、初は表面を探るのみであつたが、千八百六十九年の終になつては地面を堀つて而して地中より發掘する事を考へ出した。此時代にはアニエルには九千人以上の白皙人種が入込んで來て、ヴール河畔の最も大きなる町のグリップドリフトよりも盛大を極めた。而してスタッホードバーカーと呼ぶ、元船乘をした者が此小共和國の大統領になつた、然るに英國は此地の所有權に就て交渉を初めて到頭之を手に入れた。千八百七十二年ケープの總督カンプベル氏は警察官を連れて此地に來り英國の旗をクリップドリフトに樹てた。バーカー氏は之に反抗せずして極平穏に領土を合併する事



キムバーリー

を承諾した、プニエル丈はアールの南岸に位して居るのでオレンヂ自由國の支配に屬する事になつた。

此年十二月發掘者の一人ロビンソンは此邊を巡廻してプニエルを距る東南十一リユーの所にあるヂユトイツパンに來て、此邊の小見停が玩弄物にして居る石の中から二十二個の金剛石を發見した、それから此邊の土地又は家の建てられてある所を檢査すると非常な金剛石が發見された。又パンと稱する圓形の水溜を掘つて見た所、此處に於ても金剛石を發見したが、中には四十カラット以上のがあつた。爲にケリツプトリフト、プニエルに來て失望した者は此方へ流れ込んで來て千八百七十一年の半には本統の町を形つて寺も出來、ホテルも出來、飲食店なども建設された。ポエルス人は之を見て、非常に驚たのであるが、倫敦の南亞弗利加會社と一の契約を結で、十二萬五千法の價格で六千五百アークルの地面を此會社に讓與して了ふた。千八百七十二年

の三月にはビユルフトホンタウンに於て金剛石が發見されたが、直にホープタウン金剛石會社が買收した。是後、七月にヂユトイツパンから程遠からざるヴーリエイチヒツと稱する所で、又々發見されたので、更に此處に新鑛が開けて、資本家は資本を卸し、會社を建る事になつた。又オレンヂ自由國の方でも稅を取る方法を設けて、大統領は發掘者の爲に一人の監督者を任命したが、其監督者は以前澳斯太剌利亞の金鑛發見者のトリユター氏であつた。是からプニエルの金剛石の事を話さう。予が目を以て見れば、此勞働は最も甚しき疲勞を感ずるものと言はなければならぬ。加ふるに穴の中は風通りが惡いから殆ど土中に居るやうな工合である。それを出て來れば極狹い天幕の中に起臥して食物と云つては何もない。然し其希望は十分疲勞を癒すに足ると見えて一人が金剛石を發見すると、他の者も慾に引かされて思はず疲勞を忘れるのである。此地には仲買などがあつて直ちに之を買取

つて英吉利等へ買渡すが多くは獨逸の猶太人である。

プニエルの金剛石鑛にクリユイエールと稱する所には諸所方々に穴があつて一種云ふべからざる優美の所がある。此河の向岸の高い所にクリップドリントの町があるので、種々な見世物郵便局など、色々雜築物があるから何となく景氣が好い。此地の知事カンプベル氏は町に居つて惡兵は常に其近傍を護衛して居る。此惡兵といふのは警察事務に盡力するので、服裝は丁度獨逸の兵士のやうな單純な瀟洒な風をしてゐる。

（二）

予はニューリユシユに於て詳かに鑛夫の生活の樣子を聞いたが最初より此鑛に於ける金剛石の量は實に非常な額に上つて居る。で、以前は寂寥たる村落であつたのが、須臾にして盛大な市場と化し去つた。

此處には四五千人の發掘者が八百以上の鑛穴に從事して居るが、中には鑛夫等の如きも値に一箇月の間に於て非常の資產を造つたのもある。或一人は僅々十五日間に一萬磅以上の金剛石を發見したと云ふ事である。

此を聞いてニューリユシユに入來る金剛石探知者は潮の如き勢ひである。予の如きは千八百七十一年八月四日プニエルを出發して一人の鑛山主を伴ふてゴルコンドに到りしが、僅に一日の旅であつて、翌日其他に到着した恰も鑛穴の半を賣却する者があつたので直に四十五磅を以て之を購ひ而して此鑛山主の名簿に予が名を記入することになつた。予の居る所は最も單純な住居で、プニエルに於て借入れた牛などは返して車輛の側に一つの深い穴を掘つた。これは火を焚いたり、料理を爲たりするので、更に他に一の穴を掘つて樹などを貯へた。

予は二人の黑奴を使用してゐたが、一人はカーフル人でアルバニーと

云ふ名である、一人はモザンビックの土民であつた。此二人は予の車輛の傍に起臥してゐた。

最初の日は先づ發堀用の器具等を買求めて、翌日から愈よ勞働に從事することになつた。實に一鍬を入るゝ毎に如何に精神を費すかと云ふ事は此に書くべき限ではない。勞働を終つて、夜になると肩腕胴の邊に云ふべからざる疼痛を感ずるのみならず、更に我々自身の食物を料理しなければならぬ。或は手を焦きなどして漸く肉を炙り得る事もある。此邊で缺乏して居るのは乳、鷄卵、牛酪の類で麵包の如きも亦食膳に上ぼすことが出來ない、加之水は一滴もない。偶有つても質が悪いので飲料に供するに堪へぬのである。で、僕を行つて四リユーの所から水を汲んで來るけれど其水とても苦の生へて居る水である。それから之を荷つて來る賃が三片時には一志以上に昇ることもある。燃料に至つては更に直段が高い。僕婢を遣くに返つて而して原野の

水なき所に繁茂せる樹木を取らせなければならぬ、我事は天幕となり家となり、又寢室となる。此事は終日我々が坑中で勞働する間放擲してあるから、盜賊等は自山自在に掠奪する事が出來る。それには是非共番人を置かなければならぬ。けれど我々は此點に就いて更に恐るゝ必要がない、と云ふのは予は此邊に於ては他より尊敬されて居るから他の者に比すれば我に向つては成るべく危險を慎むやうにして居る樣子である。

更に不愉快なのは塵芥で、絶えず地面を堀るから、微風でも砂を捲揚げる。如何なる片布で掩つた處で如何なる眼鏡を掛けた處で防ぐ事は出來ない。で、此風が吹出すと、咫尺を辨ぜず暗澹たる光景になつて、是が爲には眼病を煩ひ或は痾衝を起して困却する事がある。予は一の假面を拵へて豫防の策を講じたから可かつたが友人ディー氏は可恐い眼病に罹つて遂に發堀を罷めて歐羅巴に歸るの餘儀なき場合に立

到つた。

前にも記した通り水が缺乏してゐるので洗濯が出來ぬから衣服の汚くなるといふのはない。此處の勞働者の多くはカーフル、ヅールー、ペッヂユアナ、バスートー、コランナ、グリカー、ホッテントット等の人種で中でもカーフル、ヅールー人は體軀强壯殆ど衣服などは着けない。他は大抵羊の古皮を體に纏つて居る。又カーフル人の最も所好なのは英國人の被る赤い帽子で、着物を着けないから其滑稽さ加減は一見人をして噴飯せしむる位であるが腕環脚環は丁度着けて居る。其他の風俗はどうかと云ふと、矢張り裸体であつて三本の孔雀の羽を付けた帽子を被つて威張つてゐるのもある。一たび着物を與へると決して脱ぐことをしない、腐つて落ちるまで後生大事と着て居るのである。此鑛穴中に勞働中隨分面白い話があるが、大きな金剛石が發見された時には即ちそれを探し出した者は萬歳を大呼する。同時に他の者が

和して祝聲を揚げる此聲は宛も萬雷の落つる如く穴から穴凄じい反響を傳へる。之を聞いて他の者も勇氣が百倍するので一層の熱心を喚起すのである。

此處に居る事一箇月ばかり、ケーブタウンに殘した荷物が到着したから、自分の居所を穴より百五十歩ばかりの所に移した。其處には又二つの新しい穴を堀つて種々な用に充て、車輛の傍に天幕を張つて傍にミモザー(豆果)の垣を拵へた、是で多少自分の居所も廣くなり又住よくなつた。荷物の箱などは車から下ろして天幕の中に入れ、其空箱を机に代用した。其外鑛の採掘などを買つて交代に此上に寐る規則を作つた。天幕は餘り大きくはないが此のニューリユシユに於ては最も奇麗に拵へて居るものと云つて宜い。天井は黑は護謨塗りの布を張つた。裝飾品も多少あるから見た所は宛然一の麗しい部屋である。

夜は寒氣が激しいから買入れた牛は不幸にも斃れるのが多い。然し地を堀つて埋める事が出來ないから、放擲つて置くと禿鷲が來て掃除をしてくれる。

此鑛穴に入つて勞働するには少くとも四人を要する。一人は鶴嘴を以て土を堀り一人は其土を掻き揚げる、他の一人は土と石とを分解する役目で最後の一人は石を机の上に乘せて金剛石を拾ひ出すのである。併し大きい土塊は充分に之を打碎かねばならぬ。何爲なれば此土塊の中から發見する事があるのである。斯くの如くにして小砂利を運ぶに日に二臺の車が要る。で、一週間經つと先づ十五臺ばかりの車を要する事になる。其車を區ふに一臺に就て九片以上を拂はなければならぬのである。

九月の終りになると此南方の寒氣は凄を呈して樹木は蒼色を現して來る、此時よりして次第に赤痢とか熱病虎列刺の如き流行病が襲つて

金剛石の原野

来る此地の發掘は段々盛んになつて、終には南方亞弗利加の最大市場を爲すやうになつたから金剛石新聞といふ新聞まで出來て來た。郵便局も建設された。更に驚くのは我天幕を距る四十歩ばかりの所に、馬戲場などが出來て、毎晩八時頃から十一時までは笛太鼓の音が騒しく聞えるので殆ど寐る事が出來ない。是等は一度二度の中は左程に感じないが日を經るに隨つて不愉快を感ずる。天幕の傍に來つて美音を弄する夜の鶯の方が、いくら好いか知れぬ。又曉力になると猟雀が鄙ふ其他一の黒い犬を得たが漸々馴れるに隨つて到る處附從して居つたのは予の今日まで忘るゝ事の出來ない好紀念である。

（三）

九月の終りになつて予の最好の友は大病に罹つた爲に獨逸へ歸らなければならぬ事となつたので同行をして是非歸れと勸めたが予は數月間は此地にあつて、財産を作る考で、萬一鶏卵大の金剛石でも發見した曉には此地を立去りもしやうが未だ目的を達せぬうちは歸る事は出來ないと云つて謝絶した。

我々の發掘した金剛石は漸く半カラット位の物で殆ど價値が無い。次に八カラットの金剛石を發見したが如何せん中心に黒點があるので充分の價値がない。其他十七個も發見したが到底世に誇るに足るものはないのみならず、我が財産を肥すと云ふには、到底、點に添はない。朋友が出發した後、予も亦た病氣に罹つた、此は寒國からの旅行者を惱ます病氣で一種の熱病である。段々容躰は悪くなつて手足に痛みを感じ頭は重く躰中にまで一種の不愉快なる痛みを覚えるやうになつて來た。それは痛みよりも寧ろ不愉快なる痒味を覚えたのである。然るに予は之にも堪えて常に鑛穴に入り黒奴を督して居つた。此二人の黒奴は餘り勉強しないが、之を捨てゝ他に求むる事が出來ない

から爲方なし之を使役したのである。天幕に歸ると疲勞して了つて、殆んど食物も食ふのが腦劫である。他の仕事をすると云つても太陽の照さぬ所では可けないから病勢は重るばかり、終には鑛穴へ往く事も出來ぬやうになつた。餘儀なく黑奴等に任して置いたが彼等は小量の金剛石も携へて來ない。予は天幕に居つて彼等が如何なる事を發見したかを樂みに待つて居るのに、黑奴の一人アルバニーは實に亂醉者であつて常に熱酎一瓶を携へて歸つて來る。これは金剛石を他へ賣つて酒に替へて來るのである。加之毎晩此邊の友を集めて非常な騷ぎを行る爲に予は一夜睡られない。之を懲さうにも躰力が衰えてゐるから何うする事も出來ない。併し是等を放逐せんか代るものがない。彼等は予の爲には金剛石の發掘のみならず總ての用足を行つて居るのである。それのみならず此處には暴戾なる法律が行はれて、一週間鑛穴を放擲して働く場合には他の者が之を占領する權利がある

と云ふ事になつて居る。

予は斯くの如き容躰で一箇月ばかりを經過した。幸ひにグローゲルと呼ぶ同國人がブニエルからニューリユシユに來て朝夕予の爲に藥や肉汁牛乳の世話をして呉れた、是は一のボエルスの婦人が予の容躰を憐んで此人に分配して呉れると云ふ話であつたが此介抱に依つて予は次第に快方に向つた、十月の半に至つて亂醉者アルバニーを放逐することになつたが同時に二人のカーフル人と一人のヅールー人を屈ひ入れる事が出來た。是等は裸躰で一人はオヘル一人はアブリル、一人はシツキスペン人と云ふ名である。此外ブラツキーと呼ぶ極柔順しい黑奴を通辯に屈ひ入れて、彌々此四人を以て再び發掘に從事する事が出來た、併し予が容躰は絶えず監督するやうな譯には往かぬので、某氏と約束を結んで監督の代理を頼んだが最も驚くべきは、唯だ監督するばかりで利益の半を分てと言ふ事である。此人は幸に料理の

上手な婦人を連れてゐたので、滋養物を食することも叶つたから、病は彌々快方に赴いて來る頃を益々氣力を養ひ得たのである。予は今まで充分價値ある金剛石に打付からなかつたので此近邊の鑛穴を檢して見た、然るに大概二十五ピエーより三十ピエーの深さになつて初めて價値ある金剛石を發見するのである、予の鑛穴の如きは未だ十八ピーエで今一層進んだら或は好結果を得るかも知れぬ。實際予の鑛穴は餘り好地位にあるのではない。之を買ふたのは些と輕忽に過きたので充分調査の上ならば斯くの如き不幸に陷りはしなかつたかも知れない。併し今日は如何ともする事が出來ない。

日一日裏さが增して來るので地は殆ど燃ゆるが如くで人をして狂亂せしむる程である。餘儀なく予は此地を去つてクリップドリフトで數日間を休憩しヴール河水に浴しやうと云ふ考で彌々其地に往くことになつたが來て見ると天地震泥の巷である、見る物總て青蒼ならざ

るなく、殊に河畔の高樓に登つて太陽の西に傾くを見、天然の風光に浴する愉快さ。又此河水に浴るのは實に百日の勞を慰するに足れりである。

唯だ一室に四人の客が來ると云ふのが缺點である。此ホテルに居つて食事の前になると、室の隅に一の群が居つて非常に愉快氣な有樣である。彼等はニューリユシュに來て幸にも良好な鑛穴を堀當てた爲、忽ち巨萬の財產を造り榮耀榮華を盡して居るのである。彼等が此處へ來て居るのは偖り前日の勞を慰めん爲てあらう。又室の一隅には沈默を守つて如何にも疲れた樣子の者が居る是は即ちデユトイツパンの鑛主で、水牛力を盡して金剛石發堀に從事したが、好結果を奏せずして、予と同じく病魔に侵されて療養の爲此ヴール河畔に來て居るのである。

上手な婦人を連れてゐたので、滋養物を食することも叶つたから、病は彌々快方に赴いて來る頃を益々氣力を強ひ得たのである。予は今まで充分價値ある金剛石に打付からなかつたので此近邊の鑛穴を換して見た、然るに大概二十五ピエーより三十ピエーの深さになつて初めて價値ある金剛石を發見するのである、予の鑛穴の如きは未だ十八ピエーで今一層進んだら或は好結果を得るかも知れぬ。實際予の鑛穴は餘り好地位にあるのではない。之を買ふたのは甚だ輕忽に過きたので充分調査の上ならば斯くの如き不幸に陷りはしなかつたかも知れない。併し今日は如何ともする事が出來ない。

日一日暑さが增して來るので地は殆ど燃ゆるが如くで人をして狂亂せしむる程である。餘儀なく予は此地を去つてクリップドリフトで數日間を休憩しヴール河水に浴しやうと云ふ樣で彌々其地に往くことになつたが來て見ると天地雲泥の差である、見る物總て青苔ならざ

るなく、殊に河畔の高樓に登つて太陽の西に傾くを見、天然の風光に浴する愉快さ。又此河水に浴るのは實に百日の勞を慰するに足れりである。

唯だ一室に四人の客が來ると云ふのが缺點である。此ホテルに居つて食事の前になると、室の隅に一の群が居つて非常に愉快氣な有樣である。彼等はニューリユシュに來て、幸にも貞妃な鑛穴を堀當てた爲、忽ち巨萬の財產を造り榮耀榮華を盡して居るのである。彼等が此處へ來て居るのは暫り前日の鬱を慰めん爲てわらう。又室の一隅には沈默を守つて如何にも疲れた樣子の者が居る是は即ちダユトイッパンの鑛主で、永年力を盡して金剛石發堀に從事したが、好結果を奏せずして、予と同じく病魔に侵されて療養の爲此ヴール河畔に來て居るのである。

第三章

（一）

ニューリユシユに歸るや否や予は前の鑛穴を實拂つて新に百四十六號と云ふ鑛穴を買つたが是は評判の宜い場所に位して居つて、其價は千百磅であつた。一般の說に依ると此金剛石鑛脈はコレスペルヒの鎭火せる火山の內部まで擴つて居て、此地の鑛穴は最も良質であると云ふ噂である、前の所有主ヤクソン氏は此鑛穴の爲に非常な財產を造つて蘇格蘭へ歸つたと云ふことである。

此地層は前のものとは天壤の差である。併し富鑛をするやうなもので果して金剛石を發見し得るや否やは確言するとは出來ぬ。他にも斯う云ふ鑛穴は澤山ある、此金剛石なるものは特發的に諸處に散在して居らず、或方向に向つて鑛脈を形くつて居るのであるから此鑛脈中

に居るものは最も望みを屬する事が出來る、鑛脈外のものは到底好結果を得る事は出來ない、予の鑛穴の如きも此鑛脈中にあるものであるから多少の望は有るのである。ニューリユシユの鑛脈は金剛石の鑛脈としては最も好良なもので、此邊を堀つて非常な財產を拵へたものは數多あるが、西方は餘り望がない。予の隣のウエーンライト氏の如きは多くの財產を拵へた後に資拂つた、又北近傍に居た獨逸船の船長ベー氏は亞弗利加の南海に於て船を壞して了つた、それが幸ひとなつて此ニューリユシユに來り金剛石を發堀する事に努めて、遂に三萬テーヲの金剛石を得て歐羅巴に歸つたと云ふ事である。如此例は實に無數である、茲に於てニューリユシユの鑛穴は其名を天下に廣かした。

で、人口も三萬人以上に上つたが、デユトイツパン、オールド、ドビヤス市の如きは漸を衰へて人口は半數に減じて了ひ、ブニエル、ヘブロンの如きに至つては無人の境となつたと云ふ話である。

予の鑛穴は堀り進むに隨つて其中の有樣は、實に矢の如くになつて來た、此邊の運搬の盛なる事は歐羅巴の工業燈んな地に來ても此程ではあるまいと思はれる。時としては此有樣を聞いて他より侵入し來つて之を掠奪しやうとした事もあるがヂユトイツパンから憲兵が來て之を打殺したと云ふことである。

十一月七日は政治上記憶すべき事件のあつた日である。それは總ての金剛石原野即ちヂニエルを初として其他の河に添ふたる鑛穴は勿論ニユーリユシユ、ヂユトイツパン、オールド、ドヤス及びビユルトカンタインの地と云ふものは成な英國の領土になつて、オレンヂ自由國は是より放逐されて了つたのである、此は實に單純な方法で、瞬間に運んだので、戒日の事駒馬の警察官がニユーリユシユに來て市場の中央に立ち宣告文を朗讀し自由國の旗を倒して其代りに英國の旗を樹てた。ランドロスト、トリユー氏は之に就て抗論を試みたと云ふのは即

ち自由國の領分になつてから最早十七年の年月を經て居るのに、然いふ理由はないと云ふので。然し其抗議も無益に屬して、遂に此小共和國は六萬人以上の白哲人種を以つてオメ〳〵と英國の領土と成了つた。

鑛主等は此事件に就ては左程心配をしないが、自分が腕を振ひ自分が財産を造る得意の時代は殆ど終末に及んだ。英吉利は必ず喜望峯殖民地に於けると、等しく厳格なる法律を制定して、此金剛石採堀に對する規則を作るに違いないと云ふ事を心配した、予は居ながらにして此領土に移る事になり而して稅を彼の國庫に拂はなければならぬやうになつた。

（二）

一月の初に到つて暑氣は漸々甚くなつて來た。亞弗利加の日光は到

嚴我々の堪ゆべからざるところで、昧は炙肉の樣になつて了つた。暦を檢すれば氣候は降雨の時節になつて居る、然るに今年は例年と樣つて一週間に一二度の驟雨が來るのみで、西北及び東南の風が吹き荒む工合は亞弗利加の沙漠で見るシムーンと呼ぶ風と同じ勢ひである。此地が英國の領土になつてより最も不愉快に感ずるのは道徳新に設けられたニューリユシユの村會で、種々の法律を制定して、我々の居所を奪はうとする。歎願しやうとするとがあつても三拜九拜して漸く我意思を聞屆けられる位で、水を得るにさへ非常の手數がかゝる。二月の四日から五日までの間であつたが午前二時頃に微な響きで眼を覺ました、最初は蛇に違ひないと考へて踏ずを取つて之を撿して見ると一人の黑の大男が予の枕許に坐つて頭に何か探して居たが、其結果金剛石其他道具を持去らうとする、予は之を見て直ちに蠟燭を點けて、彼の腕を捕へ、火聲人を呼んだ。之を擦ぎ出すには四人以上の力を要する。で擦ぎ出して繩を掛けて予の使役するカーフル人に監視させた。予は短銃を手にして此傍に番をしてゐるうち、隣人の領主が巡査に此を報告したが寐て居て出て來る樣子がない、のみならず、是は自分の職掌外の事であると云ふので一向取合はないので、隣人は此警察官の監督者を訪ねて訴へた。が是も同じく平然として、最早他に方法はないから、夜明を待つて我々の所へ引來れと云ふ事である。隣人のエヌ氏は此滿葉を聞いて詮方なく歸つて來たのである。盜賊は繩のまゝ、天幕の傍に横はつて居たが、午前三時頃になると酒店から醉つて出て來た群が天幕の前を通るので、盜賊は助けを求めた。彼等は醉つて居るうへに狐鏡者であるから之に加擦して、復讐をして遊らうと云ふので、予の天幕を燒いて、中に居る者は殘らず殺して了ふと云ふことである。予は乃で短銃を手にして若彼等にして侵入せば十分抵抗を試みやうと身構をして居た。然るに隣人エヌ氏は再び床から起き來て

監督者を訪ねた。監督者の曰く、見らるゝ通り、此處には人が居ない、それよりも隣家の者を呼起して互々に助け合つたが宜からうと云つて更に顧みない。ェヌ氏は頭に抗論を試みて歸つて來た際に一の山來事が持あがつた、それは彼等の濱籍者の中に其隣人を知つて居る者があつたからで、此者は此家に入つて盜賊を働かうとして捕へられた者であると說明した。之を聞いて流石の濱籍者も憤を發し遂に此盜賊を捕へて警察官の駐在所に引立てた。予は短銃を以て彼等の跡に從つて警察官に渡すのを見屆けた。此間ェヌ氏は杖を持つた四人のカーフル人を連れて此處に來たが最早盜賊を警察官に渡した後であつた。

翌日朝九時予は此盜賊事件の爲にヂュトイッパンに召喚された。此ヂュトイッパンはニューリュシュから殆ど一リュー半の所であるが法官の前に於て一々答辨せんと時間を遂へず其處に往つた、漸く半時間を過ぎて、正服も著ざる警察官は盜賊を連れて入つて來た、予は充分の陳述をした所、法官は彼に其罪を犯したるや否やを問くと、盜賊は非常に醉つて居たから其晩の事は知らぬと陳述した。法官は之を信ぜず十志の罰金を拂ふか、若くは十五日間の懲役に服すかといふ宣告をした。予及ェヌ氏は、此盜賊が如何なる處置に出るかを見て居ると、彼は徐ろに十志を拂つて、煙草呑みながら傲然と立去つた。

英國人が此地の主權者となつて以來鑛穴に於ける金剛石を盜むものが非常に殖えて來た。中には獨逸人の如き、黑奴より僅に一瓶の火酒と極く安き價を以て大きな金剛石を買入れたと云ふ話が漾山ある。最も甚しきは十五志の金を以て殆ど九百磅の價値ある金剛石を買取つた事などがある。英國の政府の支配になつてから法律が嚴しくなるのみで其實行は行屆かぬ爲、所好な眞似を爲る惡漢が殖えるばかり、殊には此邊には亂醉者が多い爲、不德の行爲は日に增し傳播する。鑛穴

主は自分の利益を保護する爲に秘密の會を開くやうになつた。然るに亂暴猥雜の所業は其會を以て之を壓する事能はずして、黑奴等は共同して恨ある鑛主の天幕を燒き、金銀財寶を燒失さした事は澤山ある、のみならず黑奴等は法廷に於て自分等の不利益なる裁判を受くれば直ぐに鬱を返すのである。勢ひ怨の如くであるから安心して職業に從事する譯にも行かない。是が爲に鑛主は尙一層嚴しき組合を設けて、萬一カーフル人よりして金剛石を買つた者は左の諸項に依つて罰すると云ふ事であつた、

第一　總ての所有品を破壞する事

第二　耳を斬る事

第三　顏を塗つて市に曝す事

第四　鞭刑に處する事

此四ッの列を設けて反則者を罰ずることになつた。

（三）

予は熱病再發の氣味で甚しき苦痛を感ずるので再びクリッンドリフトに向つて旅行を試みた。三月初旬ニューリヤシュの土地に流行の熱病に罹つた。醫師の診斷に依ると直ちに轉地療養をしなければ、或は死に陷る不幸を見ると云ふ事であつたから、プニエルへ轉じた。プコユルから又デルポートッホープに旅行を試みた。此地は河中に鑛脈があるので今四十人ばかりの探堀者が居ると云ふ事であつた。予は此地の警察官への紹介狀を持つてゐたが其警察官はコルンと云ふ人であつて、騎馬警察官の二十人以上も指揮して居る。此人も職務の閑暇ある時には矢張探堀事業に身を拋つて居る。彼は最も秘密にしてある河の鑛穴に導いて二の穴を供給して與れたのみならず、器械までも貸與して與れた。

牢に牛乳又は野菜の効で健康に復する事を得た。此處には十二三の天幕が張つてあるばかりで、クール河畔の絶景の地に位して居る。恰も繪に畫いた如くである。眼に入るものは蒼い水に綠色の原野、空氣は花香を送り、鳥は樹間にわつて妙音を弄して居る。予の天幕は最も好き丘上に位して居たから、風景は頗る好い。毎朝起るや否や七人のカーフル人を連れて此鑛穴に出掛けた。此等のカーフル人には、一週間に七志の約束である。

此地に於て發見せる金剛石は最も眞贋なるもので、プレヤル又は印度の金剛石と同類に賣れるのである。予の如きは在來の經驗に依つて一ケ月間と云ふものは頻に採掘に從事したが、思はしい結果を奏しなかつた。併しニューリュシェへ歸ると云ふ念は更に起らない、此河水中の鑛穴と云ふものは土地の乾燥せる所に於ける鑛穴とは全然趣を異にして其勞働も全然別樣である。水が溜れて低くなつて居る時分

に、小砂利の低いところを堀るのであるが堅い岩のある所まで堀るので、一ピエー或は二ピエーの所に於て、必らず現はれて來る。此岩を碎いて來て、之を洗ひ机の上に擴げて選擇をする。机などは河の岸の樹陰に置くので、之を選擇する時の愉快は能つ上せぬのである。發見したとなると殆ど天へも昇る心持である。併し非常な高價な物を發見することは稀である。百人の中漸く四五人が其運に當るのみで河水の鑛穴を探らうと云ふには短期間居る者では到底其目的を達し難い。少くも一年二年の歲月を費さねばならぬのである。此クルポーッを距る一リュー半の所、コロンと云ふ所にリカトロンゲと呼ぶ村がある。クリッカ人が住居して居る所で、某の日曜日其酋長ヂャントル氏の所を訪問した。丁度不在であつたが、弟が予を歡迎した。で、樹幹に造られたる寺院に案内して呉れた。其時、クリッカ人の小兒や老若男女の席の上に坐つて教文を聞いて居るのを見た。彷彿に眼鏡を掛けた一人

の老人が居る、是が謠人で、音頭を取るのである。中には美しい容貌のもあるので端なく伊太利のナーブルを想ひ出した。予は此儀式の終るまで、愉快に見物をしてゐた。

（四）

予はテルポーツに滞在する事一箇月の餘、再びニューリユシユに歸つて來た。歸着するや否や鑛穴の半は他の人に賣却して了つて、居所を公會堂を去る東北百歩ばかりの所に移した。此公會堂は鐵製の巨屋で、奏樂場又は劇場或は舞踏場に充てられてあるが、今日は控訴院となつて居る。移轉した理由は、朋友の一英人で、亞弗利加で生れたから土民と同じで黑奴の通辯が巧いと云ふ最も必要な人間が居たからである。名はステーブンと云つて此邊の人は知らぬ者はない。天幕は今まで一個であつたが五に增加したのみならず木造の家までを持つやうになつた。此家と云つても玩弄物のやうなもので、亞米利加人などが持つて來た殘物を買つたのである。其中には腰掛を置き又二ツの机其他道具などを飾つた。又二頭の驢馬を入るべき廐舍を買つた。予が使役する人間は一人の白皙人なる監督者と二人の白皙人の勞働者、それにカーフル人の十數人で、月に先づ百磅宛を要するのである。

初めの週間は予の鑛穴を監督するに、穴に入らず上の方に佇んで見ても十八カラット宛ある所の二ツの金剛石を發見した時であつた、此價は十テーラの價値はあるものであつた。初の中は見込のない鑛穴と思つて居たが、茲に至つて前の所有主の曾に詐のないのを信じた。予は悅びの餘り、此危險な梯子を飛上つて了つた。若も予が鑛穴に入ら

ずして上に居つたならば、此金剛石は予の懷ろに入らなかつたかも知れない。此机の上に並べて撰擇する金剛石はどの位大きなものでも五カラット位なものである。が机に載せぬ中に眼に止るものは必ず大きなものに定つて居る。一人のカーフル人が地面を堀り當て、一の金剛石を發見すると、彼は四方を睨んで自分の雇主が其處に居りはしないかを充分に檢して、而してそれを口中に入れて了ふ、若も其處に主人が居ると、それを足の下に踏み付けて、何も探り得なかつたやうな爲を爲る。而して所有主が立去つてから懷へ入れる。充分に之を監督するには二つの眼では見張り切れない。金剛石を盗む方法は外にも幾何もある。運搬の途中で盗むのもある、撰擇の時に盗むのもある。彼等は燒酎、鍬、砲或は一の女を得んが爲にこれを盗むのである。大英國の所有に歸して以來、歐羅巴人の山師が此黑奴等の盗んだ寶石を買ひ取らうため、續々入り込んで來た。是は暗り夜になつてから取引

をするのであるから、日が暮れると不正な行ひをして居る黑奴が群を爲して徘徊する。然るにオレンヂ自由國の方へ往くと夜九時過になつて黑奴が道路を歩く事は嚴禁してある、尤も主人の書いた特別の證據があるとか或は緊急なる事件の爲に徘徊する者は取除けて、何の理由なく散歩して居る黑奴があれば直ちに鞭刑に處せられるのである、此ビエートホンタインは餘り鑛主が居らぬから此處が最も恐るべき取引の行はるゝ場所になつて居た。

千八百七十一年十二月の事であつたが非常な騒動が起つた、それは或は燒酎を賣る五六の店が黑奴から寶石を買つたと云ふ事から家を燒き盗されて了つた事がある、それで此時代から倫敦の市中に於て二十カラット以下の金剛石は價値がないと云ふ事を言ひ出した爲に鑛主は大恐慌を來して一時市内が衰へた事がある、千八百七十二年の七月になつて之と同じ騒動が起つたが漸く巡兵の力を以て之を沈靜する

事が出來た。

第四章

(一)

千八百七十二年五月に入つてより彌々冬の氣候になつて朝夕は最も涼しく風冷かであるが爲に隨つて熱病の爲に疲れ果てたる體も自然に快癒を覺えて來た。此處に貯へて置く水の如きも夜になると厚き氷が張り詰める。或日の事雪が降り初めた、カーフル人は北の部分の暴い所から來る者であるから之を見て非常に悅んで白い雨が降ると云ふので奇妙な聲を發して跳ね廻つてゐる。然し不幸にも彼等の中の數百名は寒冒の爲に肺炎を起して死んだ者も澤山あつた。

ニューリンリンユに於て毎日開く市場は予が面白いと感したものゝ一てある。毎朝六時頃から埃の中を牛車か續いて往くのを見たか、其車上にはクール河畔又はモッダー河畔から刈取る薪村、又は麥、麥粉、秣、

勝其他果物野菜家畜類を積込んである、此處で大壜を殺して賣る事であるから、此市場の監督人は非常に疲れる。此者は買つた直段に付いて幾千の利益を得る事であるが、其直段は運賃に依つて高低がある。又日に依つて非常に違ふ事がある。例へば予の如きは新しき牛酪を得んが爲に一斤に付て九マルク(我國の四圓五十錢に當る)を拂つた。又鷄卵を十二、六マルク(三圓)サラド一人前五マルク(貳圓五拾錢)位である、時としては僅か一の黄瓜が二十マルク(拾圓)以上に昇ることがある。

爰に驚くべき話がある。

或英國人が小兒の爲に牛乳を得やうとして、僅に一瓶に對して五マルク(二圓五拾錢)を拂つたと云ふ事である。此邊では一般に婦人連が乳が足りなくなると云ふのは歐洲、亞米利加の女は氣候の激變に惱されるからで、ボエルスの婦人連は之に反して乳の出方が非常に多い。四日頃に予はデルポーツホープを出發したが、跡に一人の警察官を監督

者として、予が歸るまで懸命に且つ深切に勞働すべしと云ふ事を命じて此地を立去つた、然るに或日の事手紙を見るに好良なる地が發見されたから來いと云ふ事である。

予は八月の中旬に其手紙を受取ると同時に歸つて來て其地を購入した、而して監督を托せる警察官の家の傍に天幕を張つてチャンバーといふものを料理人に備入れて我住居と定めた。

如此して殊に愉快なる生活をした爲に、予は幾年も此地に居やうと云ふ念を起した。加之此處に來てより天運が向いたものと見えて、初めの月に三個の金剛石を得た、是は九カラットで白色である、併ながら不幸にして多少瑕がある、一は五カラットであるが、最も良好の品で、三番目は僅に一カラットの石であつたが優尙此上なしと云ふ、一の模範ともすべき金剛石であつた。併ながら此處に來て數百萬の財産を拵へた人などに比ぶれば予の如きは最も不幸なる人間である。カニーと

呼ぶ一紳士は、去年の冬、河水のある時分に水を遮つて、其處に堰を結び、四月から五月までの間に六萬三千マルク(三十一萬五千圓)の金剛石を得た、殊に其中の一は三萬マルク(十五萬圓)に賣れたと云ふ事である。是よりも尙ほ一層幸福な人がある。或若い佛蘭西人は、此處を去ると四リューばかりの所の絶壁の傍で、二ッの金剛石を拾つた。一は二百八十八カラットで、マルタムの王が持つて居るといふ有名な金剛石と匹敵する位であつた。マルタム王の金剛石は三百六十七カラットあると云ふ事である。

今茲に有名たる金剛石と其所有せる人を記して見やう。

佛國の王冠に着けた金剛石はピット或はレヂヤンと呼ばれたもので、價四百拾カラット半である。

露西亞のカトリーヌ二世が千七百七十五年に買つた、オルロフといふ金剛石は、百九拾四カラット四分の三であつた。

英國女王の所有せらるゝコヒニュールと稱する有名の金剛石は、二百八十六カラットばかりである。元と六百七十カラットの重量があつたが之を磨く琢磨師之を壞したと云ふことであつた。

又以前はシヤルゝルテメレールに屬して居て今日は澳國皇帝の所有品となつて居る、プロランタンと稱する金剛石は百三十三カラットである。

又南亞弗利加の星と稱するアムステルダムのコスター氏が持つて居る物は、初めの量が二百五十四カラットであつたが、今日では百二十五カラットの重量しかない。

(二)

或日予はクリップドリフトに往つたが是はテルボーッホープを距る八リューの所である。手紙などが來て居りはせぬかと云ふ事からで

ある。此警察官の貸して呉れた馬に乘つて出立したのは朝の十時頃で、翌日の四時頃には目的地に到着する考であつた。暑さは非常であつて予が乘れる馬も餘程苦しき樣子であつたから進行が甚だ遲い。殊に道は見るべきものなく、纔に荊棘の間を往くのみである。段々日は暮れて六時になり七時になり八時になる。けれどクリツプトドリフトに到着しない。闇さは闇し實に方向を失ふ位である。幸にして一の燈光を認めたから其方向に馬を進めた。然るに其燈光は消えて了つた。馬は疲れ小石にまで躓くやうになつて來た。餘儀なく馬を下りて歩行することにした。馬は歩くさへ好まないやうに、予の持つて居る手を振放さうとする。茲に於て馬を木に繋いで而して再び見える燈光に向つて進んだ非常に困難をして其處に近いて見ると一の大なる守犬が現はれて來て之を防ぐに唯だ一の道しかない。予は此犬に噛み殺される覺悟をした處へ、一人のカーフル人が燈を持つて出て其犬を呼んだ爲に辛うじて其難を免れた。

予は此者にクリツプトは如何なる方向にあつて如何程あるかを訊ねた。彼の云ふにまだ一里許あると云ふ話である。其方向を尋ねると彼は手を延ばして指示して教えて呉れた、之に禮を述べて、我馬を繋げる所に歸つて來たが、暗いので馬を見出す事が出來なくなつて了つた。再びカーフル人の家に戻つて六片を拂つて洋燈を借り馬を探し出して而して其者に連れられて好い道の所に出る事が出來た。予は此者に六片以上の金を與へやうと思つたが、予が多額の金を持つて居る事を知つたならば如何なる事をするやも知れぬと考へて、與へる事は罷めて了つた。此男は身の丈六尺もあらうと云ふ大男であつたが、予を貧乏人と思つたのは、予に取つて幸福であつた。六片の金を與へた所、彼は非常に悅んで之を受け、予の轡を取つて街道まで案内して呉れた。馬は順路へ出て歩き易くなつたと見えて、忽ち柔順になつて了

つた。漸く一時間ばかりで燈光の諸所に散點するを認めて漸くクリップドリフトに近いた事を知つた。クリップドリフトに到着すると直ちに倶樂部ホテルに投宿したが、丁度十時半であつた。予がホテルに往つた時はまだ眼かな連中が居つて騒いで居た。予は馬を廐に入れて、予の朋友なる獨逸人の所へ往つたが、此人は南亞弗利加に於て有名なるリッベル會社の代理人をして居るエルネスト、ステッファニーと云ふ人であつて、立派な石造の家を持ち、其部屋なども騎つて裝飾されてある。予に宛てた郵便は此處に到着するのであるが、我々は隣家なるストラウスと呼ぶ所で晩餐を喫した。此人は曩に獨逸から美しい細君を招んで一緒に住つて居た。

ゴルホーップに歸つたが。今度は道を間違へない爲に河に添ふて歸る事にした。夜と雖も風景が好いのみならず、或場所にはゴンゴンと稱する所があつて、其處には二十軒の鑛穴主が居る所である、其處へ往つた所其中の一人はデルポーツホープに往く近道を教へて呉れた、其方角に向つて往く事殆ど七時間にして漸く一の天幕を見出した。其傍に往つて見ると鑛色せる人間が居る。其容貌から云ふと土耳古人のやうであつたが是こそホッテントットの婦人であつた、予は其女に向つて秣と乳を要求した。婦人は直ちに承諾して大きな器物に山羊の乳を呉れた。予は七杯ほど之を飲んだ。

デルホーツホープに歸ると日が暮れて了つて其困難は名狀すべからざる位で辛々の思で我天幕に歸る事を得た。

（三）

愈九月となつたが予を厚遇して呉れた親切なる警察官コーヌ氏の家族に暇乞をしなければならぬ。予は牛車に乘つて、初めの晩はクルックスプランと稱する所のユニオンコプジュと云ふ人の家に寄た。

翌日は此邊の鑛山を見物したが彼の有名な金剛石を發見した跡などを見せて呉れた、是からニューリュシュに歸つて來たが、サーヘンリーベークリーと呼ぶ新總督が此地に巡回に來ると云ふので非常な騒きを行つてゐた。

果して九月の半頃に此總督は來られた。鑛穴主は勿論の事商業家に至るまで之を歓迎する事に務めた。此處で大宴會を張つて種々な演説もあり又舞踏會などもあつた。予も亦餘儀なく燕尾服を着けたのである。

段々月を經るに隨つてコレスベレヒの鑛穴は次第に有樣を變じて千八百七十三年頃になつては其穴の深きは百ピエー以上に上つて來て純然たる火山の噴火坑と云ふやうな有樣を呈して居る。此土を堀上げる爲に無數の銅線を布いてあつて其力に依つて土を桶に入れて運び出す鹽梅は宛然空中に架してある電線を見る如くである。殊に夜

になつて月の出る時などは頗る奇觀を呈する。是が爲に時としては土を運ぶ桶が落ちて中に居る工夫を殺す事があると云ふ事であつた。千八百七十三年の正月になつてグリツカランドの一の新總督が來ることになつた。其人はサウンーと呼んで元と喜望峰に於ける最も重要の職に居た人で、此邊の事情に詳しい。殿重に過ぎる法律は撤回し遊戯場を禁じたと云ふ事である。

予は此以前十二月にオレンヂ自由國の方に旅をした。山師等は其留守に乘じて一萬二千マルク以上の鑛穴を奪はうとした。カーフル人は金剛石の大きなのを發見したと見えて何處へか去つて、爾來十五日ばかり從事する事が出來ない。山師は此機に乘じて暴力を逞ふせんとしたのであつた。新總督が來てから斯の如き事は不德義の事であるからと云ふので、其法律を撤回して、萬一鑛穴を放擲した時分には、相當の直段で競賣に付すと云ふ事になつた。遊戯場の如きは此邊で儲

けた若い者は一夜に使つて了ふので、財政を紊亂すると云ふから悉皆禁止して了つたのである。

第五章

（一）

オレンヂ自由國に旅行したのは千八百四十三年の十二月中旬から翌年の二月一日までの間であつたが、其旅行の趣味多かりしは此處に喋々する必要はない。予が目的は此オレンヂ自由國の南方にある一村ベチユリヤへ往く目的である。予が引連れたる運送馬車は今までの物に比すれば最も好良にして且つ便利であつて、八頭の驢馬を以て牽かしめ、夜は此中に自由に寢る事が出來る。此馬車の價は二千四百マルク程であつた。五日間と云ふものは全然無人の境を跋渉した。予が此原野を通る時分には霈雨漸く霽れたる時であつて、毛龍を敷いたやうな奇麗な花は丈の低い草木の間に咲き亂れて居る。時としては際限のない原野があつて、其處には羊や牛や馬が靜かに群を爲して歩

いてある。小鳥が多いから其妙音は旅客をして羅馬の近邊でも逍遥する如き感を起さしめる。此邊の空の色雲の色と云ふものは實に非殷なもので、曉方になると東の方は殆ど金色を以て空を縫ふた如くなる。又此邊ではニリユー間毎に立派な牧畜場があり、レモンを造る畑などもあるが牧畜は特に適歩して居る。で牧畜場は五千から六千アルパンに擴つて居る。一般に水が少くないから、畑のある所は水の供給に最も便利なる所を撰ぶと云ふ話である。若天然の泉がなかつた日にはポエルス人はチキユと名くるものを造る。此南方亞弗利加に於ての雨量と云ふものは、歐羅巴の雨量に比すれば餘程夥しいのであるが、然しそれ程には恩澤を蒙らないものと見える。雨の降方は極く激烈で、忽ちにして原野の中に一條の大河を形くる始末であるが、一週間も經つと亡くなつて、洪水は忽ち旱魃に變化して了ふ。百姓等は自分の地所内に充分の餘地のある限りは人工的の水溜場を拵へなければならぬ。而して降雨の時節即ち夏の間十月より翌年の三月までは、多期要する所の水の貯蓄用意を爲なければならぬ。此水溜の如きも出來得べき丈け大なるものを拵へると云ふのは氣候が最も激烈に暑いから、蒸發が甚しいので、少量の水では迚も役には立たない。尚又ポエルス人は牛車を伴ひ又はホッテントットの僕婢を連れて、新しい牧場を發見して、それに往く時分には、充分に其邊の地勢に注意して丘と丘との間に最も好適なる所を撰んで水溜を拵へる。それは粘土的の石で作るので、四方に壁があつて、第四番目の壁と云ふものは、即ち水の溢れて出る時の用意に拵へるのである。此工事が了ると車輛の中に起臥するを厭めて、初めて煉瓦の家を造る。其間數は二間か三間位、寢室の如きは家内中一緒に寢るやうな大きなものが出來上る。雨露を凌ぐ家屋が出來上ると又其家に續ける畑を造るが、其畑には塀を廻てる。其塀は植物を以て垣を拵へたのもある。又其畑を幾つにも分割

して、麥、大麥、玉蜀黍、野菜と云ふやうに區別して其外に葡萄及梨の畑は必ず造る事に定つて居る。若ポエルスが今一層進んで花畑を拵へたならば、此邊の景色は掬するに足るものにならうと信ずる。

ペチユリヤはオレンヂの大河を距る一リユーの所にある好風景なる山麓に位して居て最も美しき小村である。予は六週間も此處に居つたが、或時は此近傍を歩行して見、又或時はデー夫人に屬する別莊に居つた事もある、此處に於て此地の人情風俗其他田舍の生活等を知る事が出來た。加之此地に居た和蘭人クレーンウエルド氏は予が爲に馬を貸して與れ、又無聊の時には書籍などを見せて與れた、予は毎朝此美しい山の谿間から落ちる瀑布に浴したが、此邊には例の禿鷲が飛行して居るのを見た。日曜日は佛蘭西人の建てた寺院に百人以上の黑奴が集つて說教を聞く。此寺院とても名ばかりで、庭の中央で說教をするのであるから、黑奴等は無花果或は椰の樹の影に端坐し、說教者は群

がる人の中に段を設けて、神聖なる讃美歌を謠ふのである。夜になると十時頃までは是等のカーフル人が金を打鳴して而して宗教上の儀式を爲る。

予は此村の近傍にある高丘の探檢を試みやうとしたが、クレーンウエルド氏は頻に此行を止めた。それは此高丘の頂には彼の有名なペヴアンと稱する種族が居て、甚だ危險である。第二にはビシユマンと稱する牧畜を事として居る種族が居て、毒矢を使つて人を射撃する事が巧いから止めろと云ふ事であつた。予は此言葉を容れて遂に此行を思ひ止つた。

此ペチユリヤには一の小鳥があるが、是は自分より小さく又自分より弱い鳥を捉へるに巧であつて、一度び鳥を捕へると直ちに尖つた木の枝に眼を打込で之を殺す。而して次第に之を喰ふと云ふ事であるが、此鳥は歐羅巴に居る鷹の類である。此外最も愛らしきものは夜る鳴

く鳥であつて、是は亞弗利加の鶯と云ふ名を付けても宜いだらうと考へる。然りながらポエルス人は之を羊の番人と云ふ名を付けて居る。何故なれば此鳥は常に牧場に居て夜其牧場の番をして而して他獸の害を防ぐからである。此北極の方に旅行した者の話にヲポニー又はヒンマルクの方に於ては、妙音を弄して鳴くモタシヌトリユチリユスと稱する鳥が居つて、旅客は夜間此悲れなる鳴聲を聞き旅情を動かすと云ふ話である。此亞弗利加の鶯聲と云ふものは愉快な音樂を奏して居るやうであるから何となく樂しい感を起させる。此外、原野を歩くと屢々見る鳥であるが其名を忘れた爲に書くことは出來ないが、毎朝太陽の昇る前に妙音を弄して鳴くのは、必ず太陽の昇る前であつて太陽が上つて了ふと其音を止めるのである。

亞弗利加に於ける此地方の曉の景色と云ふものは實に形容し得へからざる程麗しい。朝露を帶びたる草木の香は勿論深綠色せる空、其他

太陽の雲に反射する景色と云ふものは到底他に於て見る事は出來ない。時々凄き暴風雨などがあるが、是とても一の壯快なる景色を呈して、實に天下絶無の光景を現出するのである。

（二）

何故此の如き奇異な名を付けたかと云ふに、如何にも橙の色をして居るからであらうと考へる。此河はベチユリヤを距る一リコー許の所である。予は時々此河畔を逍遙したが、平均の幅は九百ヱーであつて、深さは四尋より五尋と云ふ事である。併ながら雨が降ると此倍になる。此河は矢張亞弗利加の大河と同じく氾濫する時分には河畔の家を沈ひ去り又樹木等を押流すことがある。

南方亞弗利加のミスシツピーの大河には橋と云ふものがない。僅に三箇所の渡船場がある、其一はホープタウンにわつて渡船料は割合

に高い。馬匹に付て五志半匹に付いて貳志半はかりであるが、此渡船場の收入は三つのものを合して年額四萬法から八萬法に上る事がある。洪水の時は渡る事が出來ぬので、兩岸に群を爲して其河水の平流に至るまで待なければならぬ。又牽かせる牛の數にも多少はあるが先づ四十匹位が通常である。

ペチュリヤよりニューリュシュに歸らんとするに際し他の道を廻つたが、一日を餘計に費した、初日には此金剛石の原野に住む一人の探險者を見たが、此人は老年の土人を連れて、鑛山用の器具等を荷はせて居た。翌日午後天曇り驟雨俄かに降り來つて、實に凄じかつた。此驟雨は餘程激烈なものと見えて、歩行をして居る予の顏を打ち、着物の衣兜等は水に浸された。其間は數時間であつたが、是が終ると忽ち天晴れて日光は再び燦々として原野を照した。此地に於て最も多く見るものは羽のない小さな螟である。色は黑い

鳶色で、森頃から最も多く繁殖する。其の田畑に損害を與へる事は甚だしいもので、晝夜の區別なく之を撲滅する事に盡力しなければならぬ。其の繁殖する時は、殆ど二リュー間も毛氈を敷いたやうに充滿して、草木の上に止つて居る。是が爲に大概の植物は根から食ひ取られて了ふ。之を撲滅する爲に此卵を取ると、僅二時間の間に二三十頃を殺し得ると云ふ話である。是は東方から擴つて來て、一時間に三千七百米突の速力を以て飛ふのである。然るに天の配劑は妙なもので、此虫を食ふ鳥がある。それはロキュストバードと稱へて、常に之を食ふ事にのみ努めて居る。又それのみならず、牛、馬、羊、犬、猫、猿、鼠、象、鷄の如きは、最も悅んで之を食し、又カーフル人も最も好味あるものとして食膳に上せて賞翫する。

之を驅逐する隊が出來て居て、驅逐した跡には、幾千萬と云ふ螟の死骸が殘つて居る。動物は之を喰はんとして其傍に集つて來て彼等の間

に大戦を初める。其他此螟を食ふ一の獣が居る。獣羅巴では見ぬ獣で、頭を前後左右自由に廻轉させる、ホッテントット人は之を見て天から降し給へる動物であると云つて非常に驚んで居る。

（三）

三日目にホールスミスと稱する所に到着したが、好良な宿舎があつたから直ちに其處に到宿した。此處には新婚旅行の獨逸人が居たが、近頃獣羅巴から來たやうな樣子である。此處に四十八時間滯留したが夜は暑くして到底室内に寐る事が出來ないから、戸外に床を出して睡つた所、朝枕の下に蛇があるから手を出して引出して見ると、一の蛇であつた。幸に彼が噛付く前に之を投げ出したから、予は危險を免るゝ事を得た。馭者カーフル人は此蛇こそ最も激烈なる毒蛇であつて、瞬時に人を殺すのであると話した。曉の風は寒いので、蛇は凍へて噛む

勇氣がなかつたものと見える、是からして戸外に睡る事は止めた。

漸々金剛石原野に近くに隨つて、不愉快なる有樣になつて來る。漸々我が所有地に近いた所、予の爲に不幸な報告を聞いたのは予が監督を委任せる獣人は飲酒に耽つて、殆ど予の留守中の事が亂雜になつて居る。予は直ちに暇を遣つた所、彼は虎　坡のレーデンベルヒの鑛山に立去つて了つた。

南方亞非利加は此時代より金剛石熱は何處へか消え失せて、今日は黄金熱となつて了つた。幾千萬の人間はケープタウン或はグリッカランド自由國を去つて、此黄金探險の爲に進んだ。其勢潮の如しで、ニューリユシュの如きはグリッカランドの首府となつて、此處に總督府を建て、キンバーレンと云ふ名に變へて了つた。（キンバーレンは英國殖民大臣の名である）。此處には六の寺院一の伽藍、三箇の劇場一箇の馬戯場などを初めとして、官衙牢獄郵便局市場等、純然たる小都會を形

づくつた。

第六章

(一)

はや十二月となつたが暑氣は酷烈で、夜と雖とも華氏の九十度より百度である。日光に曝せる器具の如きは忽ち燒けて鉛色を呈し且つ破壞して了ふ瓜に至るまで其色を變ずる。此の如き酷烈なる氣候に於ては倒底勞働は難しい。殊に予の使役する鑛夫の如きは次第に其數を減じて、予が瓜入れたる九人のバトラパン等は一夜の中に何處へか逃亡し、ゾールー人も亦た續いて其姿を隱した。餘儀なく之に代ふる者を瓜入れたが又之も逃亡した。遂にバスート人を連れ來りしが是も亦た立去つて了つた。此の如き有樣であるから到底充分な仕事をすることが出來ない。殊に在來より瓜ひ慣きたるカーフル人の如きも、金剛石の大塊を發見したのか、次第に影を隱して了つた。食物など

は迚も貯へて置く事が出來ない　クーフで二十四法で買へる英國製の麥粉の如き此地に於ては二百ソーブルに付て百八法までに騰貴した。北理由は氣候の爲ではない、此虎城の百姓共が金山を發見した爲に農業を捨てレーデンベルヒの金山に向つて立去つたのが一大源因である。其他到る處耕作なども出せず運送の便も次第に失つて來る、それは此運送に使役する牛馬の飼料が旱魃の爲に枯れて了つたのが主なる源因となつて居る。我々は徒らに手を拱いて降雨のあるのを待つて居るのみである。

日々の通信に依れば虎城の金山は彌々絶無の大金山であると云ふ。曾てビルグリムリユー市に勞働してゐた五百の鑛夫の如きは、非常な成効を得て、平均一リユーに付て一日金砂の一オンス位は得らるゝと云ふことである。收稅が益々增すに隨つて稅なども非常に高い。殊に彼の地に於ては法律なども完備して居て虎城の政府は特に收稅

吏を派して嚴重に課税を爲し又其他行政司法に就ては最も綿密に注意をして居る。

殊に此虎坡は天下無比の美國であつて、蓊鬱たる森林は到る處に繁茂し禽鳥百花は國を掩ひ天然の風光即ち瀑布とか溪流とか云ふものは到底歐土に於て見る事の出來ない絶大の景色を形くつて居る。氣候は最も健康に適して居て、概言すれば全世界を擧げて斯程好い所はない。此處に於て生活上何が不便であるかと云へば鑛夫共の生活と云ふものが比較的高い、それ故に此地に往くものは六箇月以上の食料其他總ての物を用意しなければならぬと云ふことである。

斯て虎坡の金山は天下の耳目を聳動することになつて來たから、虎坡と金剛石原野及レーデンベルヒの金山との間には交通が繁くなつて來て、虎坡共和國の首府クレトリヤを經て先づ七日間を要すれば此地に到着する事が出來る。此旅費大凡十八磅より三千四百八十六

法である。得る所の砂金は、カルホルニヤ澳斯太剌亞で得た物などの及ぶ所でない。價も非常に高いのである。今日堀當てたるレーデンベルヒの地はドラゴンと稱する山の傍にあつて、其砂金の在る所は獨逸のライプツヒよりドレストに到る距離があると云ふ事であるが、是とても其一部分に過ぎない。先づ概算五百リユー以上にして、其脈はリンポヽよりザンベーズ河に到るまでは殆ど此脈を以て掩はれて居る。又虎坡共和國の他の部分に於てはアゲールベルヒの北南に同じく大金山を發見したと云ふ事である、其金山の所在はリエットガースと呼ぶ耕作地の内にある。其他ズ！トバンスベルヒ州も同じく金鑛を以て掩はれて居る。で此虎坡全國は殆ど金鑛に包まれて居る國であると云つても宜い位である。それゆゑレーデンベルヒかドラゴワに到るまでは充分な道路を造る事に定つて居るが、今日までの道路は纔に土民の肩に依つて運送さるゝのみである。

此の如き有様であるから金剛石の發見に力を盡した者も隨つて黄金の方に力を傾けるやうになつて來る。以前二百磅の直打の金剛石も値に四十磅に下落して了つた。同時に賃銀は倍々高くなる。それであるから併れなる鑛穴主は、到底長く維持する事が出來ぬから總て黄金原野の方に向つて立去る事になつた。値にヴール州の金剛石發堀者が勇氣を鼓して其事業に從事して居る位である。殊に段々氣候が悪くなるに連れて、金剛石の穴は崩壞し初め、日々諸所の鑛穴に雷の如き響きを爲て折角の苦心も水泡に歸して了ふのである。

（二）

五月の中旬頃になつてグリッカランドの前王ウオターホアー大尉及バトラバンの國主なるマンカローヌ王の二人は此地に來た。我々は之を歡迎しなければならぬ。で之に隨ふ者は大臣或は參謀官等であ

る、又有名なる山師で且つ陰險な彼のアーノットと稱する者も之に隨從して居つた。是等の人の函館の盛大な事は驚くべきもので、土民の二三百人は其後に從つて居る。此二人の王は天幕をサウシー氏の住居の傍に張つて、其處に住ふ事になつた。サウシー氏は此兩王の爲に國旗などを立てゝ、如何にも一種の離宮の如き体裁を拵へて遣つた。予の如きは之に謁見するの光榮を得て、國王の光臨を願つたところ、直ちに許容されて、翌日予の天幕に來られたが、家が狹いから此二人だけを室内に入れて他の者は車下に待んで遥御を待つ始末である。予は此兩國王と長時間談話を試みたが別に面白い話もなかつた。それから墾應の川意が由來、主客各々座に着いて酒食をなしたが、我に仕ふる白人の屈人等は殆ど五十法以上の酒リキュー等を彼に呈した。半時間許にして食事も濟み立歸つたが間もなく一人の騎兵は駈足で戻つて、來て、マンカローヌ王の代理として予に懇願する事があると云ふ

事であるから、早速引見して其厚意を聞くと、彼は先刻飲んだ佛蘭西のブランデーコギャックの一瓶を惠與しくれよの旨を傳へた。

予は之を謝絶ずる積はないが、之を信じない、恐らく國王の名を借りて此者が請求する非と察したから最も下等な一瓶を與へた。彼は欣々然として立去つた。ッオタ　ーポアー大尉(英國では此國の土民の王には大尉の稱號を與へたものと見える)は怜悧にして且つ温和なる人であつて、此マンカロアースエよりは文明的の思想に富んで居る。此人は洋服を着けて居たが、一見以て熱奴の紳士に裝したる事が解る。

是等の人は英國の攻取政界に就ては最も有用な人物で、此外の國王との間に非常な衝突があると云ふ話である。

八月の中旬になつたが、予も彌々英領土の人間となつた。隣人が黄金の原野に出發した爲、予は天幕の傍に一の庭園を造つて初めて此地に草木を植ゑ多少淋い色を見る事が出來た。又花類も多少繁殖し初め

た。是は此地に於て最も愉快に感じた狀色で、此庭内に遊逍する時は實に極樂淨土に居るやうな心持がする。尚又予が家に小さい軒を拵えて、北處には蔬菜などを植はせて暑期の涼み場にした。これには水が必要であるが、少量では用を爲さぬ。然し此邊の水は一樽二法七十(日本通貨に換算すれば一圓以上)である。予は地を堀つて泉を發見する事に盡力した。月末になつて西北の風は吹き初める、氣候も何となく蒸暑い。是か爲に予は熱病に罹つた。

九月十四日になつて、此氣候は頓に冷却して列氏の八度に降つた。のみならず雪も降り初めた。こゝで予の熱病も快復の時機に近くであらうと云ふ考から、大に勇氣も付いて來たのである。此雪の非に就ては前にも記したが、全州を挙つての悦びであつて、諸所に人物などを遣り、小見は勿論市民一同打揃つて戯れる。又雪投をして街道を通行する人に向つて戯を挑むと云ふ有樣で、宛も伊太利の祭を見る如くであ

る。伊太利の祭に於ては小紙片を投げるが、此地に於ては雪を代用するから、其興味は一層深いやうに見えた。雪と共に暴風は吹き初めて小さい家屋又は天幕の如きは、殆んど爲に倒れて了ふ。或部分では負傷者又は死傷者があつたと云ふ事である。

（三）

徐々再び夏が來るにつれて、病氣は流行し死亡者も增加して來る。予が住つて居る所は、此町に於ても貴族社會の居る所であるから、居住も清潔であるので、傳染病の如きも他の部分に比べては餘り猖獗を極めない。此地には隨分種々な天幕を張つて居るが、彌々妙な形も殖えて來る。土耳古風のもの、玩弄物の如き物も建てられた。大小各々形を異にしてゐて、一種の風致を添へた。併ながら此天幕の生活は日中は暑くして夜間は最も冷氣を感ずるから、火を焚いて之を凌がなければ

ならぬ。殊に盜賊は四邊を徘徊して或は危險なる武器を利用し、睡れる人を殺して金銀財寶を掠奪する事は度々である。加之爛醉せるカフル人は夜になると群を爲して全市を闊步しつゝ亂暴を極めるのである。

此外鐵製の家なども出來た。即ち寺院の如きはそれに依つて建てられたもので、外部は實に壯觀を極めて居る。日に映ずる銅色は人目を眩するばかりで、之を以て盜賊などを防ぐ事が出來るのである。併し其費用と云ふものは幾千磅幾萬磅を價する。又或時は幾千萬磅と云ふやうな價もあると云ふ事である。木の家は此鐵の家よりは餘い。南方亞弗利加に於ては木と云ふものは實に一の驕奢品である。其を如何にして此地に持來るかと云へば、那威又は北方亞米利加で總て組立て方の用意までして來るのであるから、價値の高いのも無理はな
い。

予の家は幸に木造であつたから、堅固にして且つ空氣の流通も宜い、窓掛其他裝飾品總て闕ける所はない。此外壯觀なるは土と煉瓦を以て造つた家である。内部は木造にして泥を塗るのであるが。此粘土の供給には不足を告ぐる事はない。供給が自由であるから隨つて壯大な物が出來るのも容易で一見以て倫敦巴里、伯林の立派な家に匹敵する建物も敢えて難しくないのである。

此キンバーレーに於ける家の下層部は最も驕奢を極め、其内部の裝飾と云ふものは實に驚くべき華美を盡して居る。然し餘程勇氣がなければ、到底此の如き所に長く居る事は出來ない。故に彼等は努めて自分の家の内部を裝飾し、其處に入つて一日の勞苦を休めると云ふ方に心を傾け、又は我が家族等を招んで一家團欒を求めやうとするのは自然の勢であらう。

（四）

予は夜間に外出する事は最も稀である。此邊に於ては婦人社會の價値のないと云つたら甚しいもので、到底彼等を相手にする者はない。又旅情を慰めてくれ手もない。

或晩の事で、予は一の奇談を得た。午後九時頃の事であつたが、丁度眠りに就かうとすると飼犬の甚しい吠聲に耳を聳てた。予は床を出て、洋燈を持つて戸外に飛出し諸所方々を檢めて見たが人影ありとも見えない、犬は猶ほ吠び續けて予を導かうとする。予は犬の泣き吠ぶ方角を充分に注意して見ると、凉臺として車下に備へておいた長椅子の中に一箇の怪しい影が見えた。近いて見ると果して人間で、横臥して居る。予は盗賊であると思つたから、近よつて詰問すると、彼は辯解を試みやうとしたが犬を恐れて出て來ない。此處慨を熟察するに、彼は

盗賊に非ずして、犬に吠へられた爲、此處に徜徉したと云ふ有樣である。予は犬を逐拂つて了ふと、彼は除ろに長椅子の下から現はれて來たが、多少酒氣を帶びて居るやうである。で、自分は自由國から徒歩して此邊に來たもので、何れの處に往つて宜いか分らない、吠尺を辨ぜぬ闇夜でもあり、遂に此所に來て犬に吠えられて彷徨いてゐるのであると云ふ事である。彼は斯く云ひつゝ名刺を出した。

其名刺にはロードタンレーと云ふ貴族の名が記されてある。實に奇怪である。此者こそ歐羅巴の貴族社會に於ても屈指の一人である。殊に有名な鑛主である。彼はマリスチュアード皇后の血統で一種の好奇心に驅られて名を隱して此亞弗利加沙漠を跋渉する爲、此地に來たものと見える。

予は一時茫然とした。で更に語を改めて最も丁寧に、我家に導き、長途の疲れを休めて、是から先きへ進んでは如何であると訊ねたところ、彼

は無知巳の人の世話になるよりは、ホテルがあるならば、其處に往つて宿を求むる方が勝手であると云ふ事を云つた。予も彼の云ふ所一理ありと考へて、此地に於ける最も大なるホテルを指示し、而して洋燈を貸して、ホテルの傍まで道案内をして、家に皈つて來た。

それから數日の後一の警報が予の家に達した。それは近頃此地に一人の若い流浪者があつて、貴族の名を濫用し諸所に立入つて助けを求める事があるから、注意せよと云ふ事である。所謂氏名擬稱であるが、之を抑へて法廷に訴へんか非常な費用を要する。損害を受けた者すらも彼を相手として損害賠償を請求する事は出來ないのである。遂に此事は終局を見ずして終つたが、予は其當時彼の躰度から其樣子から眞の貴族であると信じたのであつた。

第七章

（一）

千八百七十四年となつて降雨の季節中は鑛穴は非常の損害を蒙り、折角苦心して堀つた穴も半埋れたものも數多い。それのみならず崩壞の爲に種々なる器具物品は破壞された。予は數箇月以來第二の鑛穴主となつたが爲に、或日の朝檢分に往つて、將に此鑛穴を出でんとする時、土砂の崩壞から圖らず二十ピエーの深さに墜落したが、幸にして創傷もなかつた。若し予にして天運あらざりせば、其時落ち來る岩塊の爲に命を失つたかも知れない。此兇變を知つて此近邊に居つた者共は驅け來つて予を助けて無事に出る事が出來たが、多謝すべきは警察官等の盡力である。

此鑛穴に溜りたる水を汲出さするには蒸氣の力を借りなければならない。併し非常な雨量は爲に汲乾すまでには長き日時を費さなければならぬ。其水が未だ乾せずして此鑛穴に溜つた光景は何となく物凄く、殊に月夜の時などは一層凄絶である。之に反して予の庭園の植物は是が爲に非常な功を奏した。雨霽れて後と云ふものは、草木一度に繁生し初めて渤海の如きは一時間毎に丈を延ばすやうに見える。何れより飛び來りしか麗しき蝶の群ふ有樣は實に愉快に感じられる。故に蒙昧野蠻なる鑛夫の如きも麗しい花を見朗なる天氣に鳥の囀なるを聞けば自ら其心を慰むるものと見えて顏色も何となく柔らいで來る。此地の總督は此機を利用して公園を開いてキンバーレン公園と命名した。予の庭園には常に小さい奇麗なマルカチスと呼ぶ猫にもわらず猿にもわらざる動物が戲れて居るが、此は南方亞弗利加に於て屢見受けるものである。其樣子は實に不思議で後足を以て立つて居るが、殺も猜疑心深く、値な書微な聲にも直ちに耳を欹つて、何處へか

逃去つて了ふ。併し之を馴らすと、實に能く馴れて性質も温和である。又勇氣があつて大きな犬に向つて猛進する。犬も之に對しては避易して可怕々々逃げて了ふ。予は此獸を捕へ得て、毎日彼等と戯むるゝを一の樂みとして居る。

黒奴の鑛夫には種々の人種がある。バスートーバロツンゴ、バトクパンゾールー、ブシンゴー、マホーバ等で此外虎坡共和國の奥から山て來るマカラカ、マシロ等も混つて居る、是等の人種は骨と皮ばかりで殆ながら骸骨の如き有樣をして居る。彼等が如此疲勞するも無理はない。彼が此地に來るには殆ど四箇月の旅行をしなければならぬのである。氣候は非常の暑さで白人種の如き弱い者の到底堪ゆるところではない。

此旅行中途中に餓死するもあり、或は渴死するもある。で時とすると一群の半以上を減ずると云ふ事である。色は最も濃き銅色を帶びて

手には銅の美しい糸で作つた飾物等を着け、首には眞珠貝のやうな物を着けて居る。此地に居るカーフル人は之を歡迎するが爲、妙な聲をして叫ぶと、同時に他の群に至るまで之に應じて絶叫する樣は一の奇觀である。而して食物などを與へて其長旅の勞を慰めやうとするのである。

（二）

七月十四日予の有てる二つの鑛穴を他人に讓與して了つた、予は茲に於て鑛主の權利を捨てたが爲に全く自山の身となつた。併ながら不幸にして充分の收益を得なかつた、此二つの價値は八百磅で其百分の五は周旋人に拂はなければならぬ。予は之を讓與した日から十五六日を經過したる時、八號の鑛穴は非常に好良なのがあつて、値に一週間の間に三百磅の寶石を發見したのである、其中には三十五カラットの

物もあつたと云ふ事で。今日では九百磅以上に騰つたと云ふ話である。予は此鑛穴より非常な利益を得んとする間際に於て捨てたのである、予は餘り放擲して置いた爲に勞働者などは多くの收得を予に隠して居つたかも知れない、予の熱病に罹りし間に一人の歐洲人に萬事を任して置いたが是等が非常なる利益を得たに違ひないと考へる、併し予が此鑛穴を賣拂つて了つて金剛石發見の報を聞つたのは三の理由がある、第一正直にして且貧銀の雇い者を區ふ事が甚だ困難である、第二、盜賊は徘徊し彌々此邊の行政は紊亂して正邪を區別する事が出來ない爲に著々非常の損害を受けなければならぬ。第三には比較的良い買人があつた爲に、之を賣るが好機會であらうと思つたからである。

今一層予をして失望落膽せしめたのは給仕人が予の金庫を開いて殆んど八千法以上の金剛石を盜み去つた事である、其八千法の金剛石は數

週間を出でずして、キンバーレーの寶石屋の手に入つて、殆んど一萬法以上の價になつたと云ふ事である。

如此盜賊は徘徊し折角の好結果はありながら利益を得る事が出來ない、それ故に望を絶つて金剛石發見には再び手を觸れぬと云ふ決心をした、之と同時に予と同樣な轍を踏んだ人がある、或晩の事某大尉がキンバーレーの町を散歩すると、予の家を去る遠からざる所に顏を塗つた三人の白人が現はれて、其人の乘れる馬の轡を取つて、馬より引摺り下した、而して猿轡を咬めて其懷中を檢し、衣服は勿論の事金錢其他總ての物を掠奪したと云ふ事である。馬は之に驚いて厩に飛歸つた。其人の婦人は馬の歸來るを見て、非常に驚いた、其夫人の安否を心配して居つたが、憐なる大尉は數時間の後漸く氣が付いて家に歸つて來たが、最早時は遲れて此盜賊等は影を失つた後であつたと云ふ事である。

月夜の晩などは最も危險である、盜賊等は鐵穴に侵入し來つて人の睡れる間に發掘を試る事は希しくない。であるから此地に於ては種々な事情が起つて裁判所の繁忙は紙に盡されない。予の如きも十一人ばかりの證人となつて法廷に召喚された事がある。

（三）

玆に雇入れたる僕婢の事に就て些と記しておかう。予がキンバーレーの鑛主として居つた時に雇入れたのは十二人であつたが、其内八人は女で四人は男であつた。最初に雇入れた女の如きは最も盜賊術に長けて居ると云つて宜い。其他印度で生れた英吉利人もあり印度人もある、又ホッテントット、カーフル、獨逸人もある、是等はそれ〳〵一の缺點を有つて居る、混血人は性質温和で命令を奉ずる點に於ては使ひ易いが、老人で不潔である。印度人は値に十八歳の女で顔も奇麗であるし、又容子も優美であつたが陰險であつて慍りつぽいから至つて御し難いのである。

其次に雇つたのはカルカッタの印度人であつたが、年も老つて居つて體も壯健である、然るに此者は非常な飲酒家であつて、亂醉をする、予の所へ來た時も初は酒を慎んで居つたが馴るゝに隨つて三日三晩も酒を飲み續け大醉して職業に就かない。唯自分の其人の名を呼ぶのみで一向予の命令を肯かない、漸く四日目になつて醉が醒め、一ヶ月ばかりは能く働いた、此者は洗濯商賣をせむが爲、黄金の原野に立去つて了つた、其次に來たのは現の印度人であつたが是亦た酒食ひで、殆ど醒める事がない。其梁酒の結果として顔色など變になつてゐる。到底之を使用する譯にも往かないから遂に暇を出して了つた。去る時になつても飲み餘せる酒を飲んで立去つたと云ふやうな有樣である。其次がホッテントット人であつたが、是は二十二歳の若者で其容貌の醜

なる、到底人間とは思はれない位である、顏は死人の如く、鼻はなし、眼は蜥蜴の如しで、氣力なき有樣は支那婦人の標本である。けれど柔順で料理の心得がある。是はホッテントットの酋長より特に予に送つて來た者で、予の使役する一人の僕は之に惚れて、毎日曜日は互に手を取つて寺に往き、夜は近邊を散歩すると云ふ風である、是が爲に次第に職業を怠るやうになつたので予は之を放逐した、次に來たのはカーフルの婦人である、それから獨逸人が來たけれども、僅の間で充分に性質を見る事が出來なかつた。其次は英國婦人のスミスと云ふ者を雇入れたが是は性質最も單純にして且つ働人であつて、予が此地を出立するまで雇ふて居つた。此婦人に妹もあつて或カーフル人と婚禮して居る、其夫人はカーフル人と云つても開化したもので、決して輕蔑した者ではなかつた。

カーフルの婦人の事に就ては前にも記るしたが、實に美しい容貌で、若し之を歐洲劇場の舞臺に上ぼせたなら、非常に喝采を博するに違ひないと思ふ。

金剛石の原野に來たのは多少艶話もあるやうに聽いた、些と採摘んで言はうなら、此女の父といふのは土民中の有力者であつて四人の子を持つて居た。四人とも女であつて容色は麗しい、婚禮の場合になつて見ると其婿となるべき者に一人の情婦があつた、此カーフルの風習では其夫人が多妻である時分には三日宛交代と云ふ事になつて居る、若し二十人の婦人があつた場合にも矢張其規則に從はなければならないそれ故に若も其夫人が最も愛する婦人があると其規則を破つて他の婦人の所に往かないやうになる、是が爲に他の婦人は嫉妬を起して或は毒殺を試みる事なども度々ある、然るに予の所に來たカーフル人は此者を蛇蝎視して、或晩の事密に其處を去つて、此金剛石原野に逃げて來た、然るに其人は此者を愛して居つた爲に、跡を追駈けて來て、再び

婦人を自分の手に入れやうとしたが、此處に來て居る間に、或白人種に遭遇して其者に愛を移して、此婦人を放擲したと云ふ事である。此邊では其人と云ふものは最も大切な者であつて、決して其妻に物を與ふるやうな事をしない、偶々獵に往つて獲物があれば之を持ち歸つて之を妻に與へる、妻は之に反して自分の勞働して得た物を其人に與へなければならないと云ふ風習である、唯だ此婦人の缺點と云ふのは酒を好む事であつたが、如何なる事情か直に去つて了つた。

第八章

（一）

愈々此地方の盜賊の數は殖えて一種の團体を形造るといふ始末である。而して彼等の其民を害し物品財寶を掠奪して得る所の收獲は一週間に壹萬磅以上に上ると云ふ話である。ソール河畔にあつた鑛穴の如きも、今日は寂莫として了つた、ダユトイッパンも北通りである、又ウオールド、ドーヤも洪水の爲に到底發掘する事が出來ない、コーレスペルヒの如きは三百九十三の鑛穴があつて、四十三萬八千百磅の稅を徵する事が出來たのに今日は最早八十の鑛穴に減じて了つた、それさへも或會社の手に入つて殆ど以前の盛業を見る事は出來ない。

予は或日の事グリッフトドリフトに往つて、友人の家に八日ばかり滯在する事になつた。此人は金滿家であつて生活も豐である。家など

も非常に立派で、今日は發掘は廢めて、金剛石の賣買に盡力して居ると云ふ事である。

キンバーレーに歸つて來て見ると、毎晩或場所に人が群集して非常に騒がしい、其源因を聽くに、幽靈が此所に現はると云ふ事である。其幽靈は或丁抹人の亡魂で、美しき妻に欺かれて失望落膽の餘り死んだと云ふ事である。で毎夜此家の窓から現はれる、其家と云ふのは近頃雖も住人がないのである、予は考ふるに此處へ手品師が來て斯の如き戲れをするのであらうと思つた。

予は慰を慰める爲にヂユトイツパン、ウオールドビーヤなどに遊逸を試みた。此間馬車の賃銀は半時間に二法七十で、車には六人を乘せる事が出來る、ヂユトイツパンに往く道は樹木繁茂して居つて麗しい街道であるから充分に眼を樂ませる事が出來る、此ヂユトイツパンは今こそ人口も減つて了つたが何となく壯大な村である。大きな街道は

キンバーレーに屬して居る。其の大きなホテルの如きも今日は唯だ其形を殘して居るのみで、食堂に人なく部屋は塵埃の積るに委してある。

此處の鑛穴とは發掘者がない爲に道路正しくして諸所に小丘を爲して居る。此ヂユトイツパンに於て見るべきものは水溜である。湖水の如き大さで或は此中へ來て泳いで居る者も澤山あるが、予も好奇心に驅られて之に入ると、豈圖らんや二三十匹の蛭が體に喰着いたから慌いて逃げ出したのである。

ウオールドビーヤはキンバーレーを距る非二十分ばかりの所である、此處も洪水の爲に慘澹たる有樣になつて了つた。此近邊に小さな山がある。登ると諸所方々の風光が眼中に映じて來るのが一の絶景である。

（二）

キンバーレーの東方にポスホッフと呼ぶ一の山がある、一日之に登山を試みた。同行者はチユリンゴユ男爵で、二三日間此原野に來て居る人である。蓋し其人は、營利的でなくして自分の許嫁の爲に自分自ら金剛石を取つて贈らうと云ふ考で、一の鑛穴を買つて、自分の連れて來た那威人と十六人のカーフル人を使つて、其希望を充たさうとしてゐたのである。

我等は此山に登らうと云ふ考から充分に食料其他酒などを用意して山立した、途中同伴者は亞細亞の紀行などを話して呉れ、其山籠に近たが、太陽は中天に昇つて、殆ど正午頃になつた、此邊の原野にはプンチロロップが徘徊して居る、其他熱帶地方の動物も隨分見受けた、漸く二時頃に此ポスホッフの山籠の最も近き所に到着した、五時間の豫定を以て來たが三時間を超過して八時間を費した。

チユリンゴユ男爵は予が疲れて居るのを見て、自分の僕婢等を連れて、一層山に分け入つたが四時間ばかり經つと一の砲聲を聞いた。望遠鏡で望むと山の上に一人が居つて、頻りに半巾を振つて相圖をして居る、予は勇氣を鼓して彼の招きに應じて其地まで往く決心をした。山に登ると岩石澤山で一歩毎に苦みは增して來る。殊に矮小な荊棘があつて衣服を裂き又は輕傷を受け、血塗になつて、漸く友人の所に往つたが其處に倒れて了つた。此處は廣々たる原野であつて、諸所の風景は眼中に入つて來る。四十五分ばかり休憩した後、此を出立して、谷河に沿ふて段々降りた。此邊の景色も亦た繪の如しである。山又山を越えて原野に出た時は最早太陽は西に沒して遥々夜の世界になつて來た。予は終日の疲勞の爲に殆ど歩行も出來なくなつた。尚五時間ばかり歩まなければならぬ。友人等は健康であるから、少も

衰へた様子も見えない。彼等は予の衰へたのを見て勇氣を付けやうとして唄などを謳ふ、予は之に連れられて歩るいたが幾度となく倒れやうとした。

到頭力盡きて一歩も歩けなくなつた。爲方がないから、明朝元氣を回復してから諸君の後に追付かうと云ふた所、彼は此所に予一人を殘すことは出來ない、斯の如く互に手を携へて來た以上は離るゝ事はしないが、此處で夜を明すことは出來ない、殊に空腹であるから一刻も早く食事を得らるゝ場所まで往かなければならぬと云ふので、頻に予に勸告して居る間に、圖らず燈火が見えた。予は之は燈光にあらず星の光であると云つたが、彼は燈光であると云つて承知しない。此言に激せられて再び歩み出したが、勇氣が付いて歸る事が出來た。予の料理人は燈火も消さず支度をして待つて居て、呉れたから、直ちに暖い珈琲を飲んで寐る事が出來た。

（三）

愈々キンバーレーに暇を告げて此地を去らなければならぬ。此處には書籍館も出來、予の如きは終日其處に入つて讀書に時の移るのを知らなかつた。又製氷場も出來るし、其他浴場菓子屋なども出來た、三年前の事を思ふと實に夢のやうである、如何なる美食も此地で出來る、又一定の價格を以て料理店に往つて好美なる酒を呑むことも出來る、冬になれば鄉踏會などもあり、夏になれば河水に浴して涼を取る事も出來る、予は家を去るに臨んで寫眞を取つて後日の紀念とした。

八月十六日になつて日蝕があつたが、歐羅巴人は此日蝕の理由を知つて居つたが、土民等は知らぬから之を利用して一つ彼等を驚かさうと云ふので、其朝土民等を集めて云ふに、予は今日お前等の爲に哀む事が出來た若もお前等が今日まで此鑛穴に於て盜んだ所の金剛石を返さ

ない時は、太陽は其影を隱して非常なる闇を加へるであらうと言聞した。

カーフル人はそれを聞いて信じない。然るに午後三時に至つて太陽は次第に闇くなり初めた、段々闇くなつて來て、空の星までも見えるやうになつて來た。カーフル人は之を見て恐怖の念を起しそれ〳〵主人の所に往つて、嘆願をして七十五カラット以上の金剛石を返し、而して太陽の怒を靜めて呉れと云ふ事を請願した。同時に他の者等もそれ〳〵金剛石を返付したが實に日蝕を利用して立所に一萬法以上の物を取返したのは眞に愉快の極である。

第九章

（一）

此地の總督なるサウシー氏は好人物にして此地の人より尊敬せられ、行政上の監督に就ては盡力せられて、此國の爲に最大なる事業を企てた。それは、此グリッカランドの河を利用して運河を造ると云ふ考であつた、さうすれば沿土の所も隨つて水の灌漑さるゝ爲に耕作に適して來るやうになる、又收穫も多くなつて來るし野菜なども繁殖して彼鑛夫等の生活も樂になる次第である。

予の如きも我庭園で作つた野菜は出來得べき丈はキンバーレーの市場に之を賣らしめたのである。頗る利益になつた。予は馬車と二の驢馬を八千法に賣却した、此驢馬に就ては好き結果を得なかつた、予が初めから今日まで飼養したる數は六頭である、一頭は過當の食料を與

へたので死んで了ひ、二頭目は何處へか逸し、他の二頭は何者にか盜まれて了つた。予は此二頭の驢馬を失つた爲に最早帰ねる途もないから放擲して置いた。然るに友人等は之を新聞に廣告せよと云ふので、頻に勸告をする。予は其勸告に從つて廣告をした所、果して現はれて來た。茲に於て總ての器具などを賣却し、天幕及家屋の如きも之を競賣に附して、一物もなき眞の旅客になつて了つた。

（二）

十月の終になつて予は實に奇怪なる事に遭遇した。午後七時頃であつたが珈琲を飲んで居ると、如何にも奇麗な生れてより數週間を經過したと見えるアンチロップのやうな獸が悄然に飛込んだ。長い耳を有つて居て、極く感情の強い獸で、寧ろ馴れると云ふ事がないのに、頭を予の膝の上に乘せて、更に恐るゝ容子もなく、何か憐を乞ふやうな有樣で

ある。予は之を抽へてヂャリと云ふ名を付けた。ヂャリは未だ幼くして飲む事も食ふ事も知らぬ爲に、之を育てる事に就て苦んだ結果、漸く一匙の乳を飲ましし得た。然るに此味に感じたか二杯目を請求するやうである、それより第三第四と云ふやうに飲ましして、遂に之を飲むやうになつた。翌日よりヂャリは予の朋友となつて、或は庭園の内を駆け廻り或は予の膝の上に睡つて居る、夜は籠の中に入れて寐かせる事にした、次第に大きくなつて來た、性は極く順しいけれども夜になると騒ぎ出す、殊に月夜の晩などは彼の勇氣は勃々として、床の中から出て予の寐臺に飛び上り予の手を舐め顔を舐めなどして騒ぎ廻るのである。

十一月に入つて予はボスホッフに旅行を試みた。此ボスホッフは自由國にある小さな町であつて此キンバーレーより八時間を要する所である。ボスホッフはオレンヂ自由國に於ける町と同樣に最も清潔であつて庭には草木果物などが充分に繁殖して非常に奇麗である。

予が此地に居る間に大火があつて、殆ど此ポスホッフを灰燼に歸せしめた。

第十章

（一）

はや金剛石の原野に年を閲する事三年半、予は歸心矢の如く、將に此地を去らんとするの心を決した。或日の事、自分の使つて居た料理人の爲に非常な損害を受けた。予が鑛穴より歸つて見ると、悲飯の用意がない、即ち料理人は何處へか立去つて、其形を認めないのである、予は直ちに金庫を檢して見ると、金庫は破壞されて居る。而して其中に入れたる金剛石の箱は盜み去られた。此箱の中には八千法餘の寶石を收めて置いたのであるが、此盜賊は料理人であるに違ひない、而して予の給仕女は昏醉して居る樣子である。是は魔醉劑を珈琲の中に入れて飲まされたものと見える。茲に於て予は直に途難屈をして、充分に注意を爲初めた。十五日ばかりは何たる結果もなかつたが憑賚を以て

新聞に廣告した所、果して此盜賊はオレンヂ自由國の主府なるブロームホンタインの牢獄に捕はれて居ると云ふ報告を得た。直ちに之を請求すれば手に戻ると云ふ事である。然るに此オレンヂ自由國と英國殖民地政府とは互に相反目して居てグリッカランドで惡事を爲したれば總てオレンヂ自由國に遁げて往くやうである、故に之を請求するも彼は其求めに應じない、予は政府の手を借りて掛合をしたならば到底結局する事は六ケしいと信じた故に、予一人の名を以て自由國の官吏に斷へたが、果して予の思ふ通り進行して、彼の政府より召喚さるゝ事になつた。予は茲に於て二人の兵隊に連られてブロームホンタインに往つたが二十五磅を拂つて罪人を予の手に引取つた。

然るに此者は一も金剛石を持つて居らぬ。キンバーレーを去る時分に早や何れへか賣拂つた樣子である。此者を連れてキンバーレーに返つて來たが途中大雨に遇つて河水氾濫し原野は湖水に化して了つて、歸路の困難と云ふのはなかつた。キンバーレーに歸つて、直ちに罪人を法廷に導いて充分の訊問をした結果、彼は或仲買の者に敎唆されて此惡事を働いたと云ふ事である。其仲買人はバンドと呼ぶ者であつて、金剛石は直に彼の手より値なを以て買取つて自分の仲間へ賣つたが、自分の身の危きを知つて何處にか立去つたと云ふ事である、然るに二月後に至つて喜望峰殖民地のグラーフ、レーテーと云ふ所で彼を捕縛する事が出來た。之を充分に訊問した所、彼は其金剛石をハーレーと云ふ一人の若い歐羅巴人に賣つたと云ふ事である。如此事件の緒は亂れて來て、予は到底望みを有つことは出來ないと云ふ決心をしたが幸にも此歐羅巴人を捕へる事が出來た。之を詰問すると、彼は予の金剛石を買求めて、而して其翌日パートカンタインに往つて、之を寶石屋に賣つたと云ふ事を白狀した。此人は直ちにキンバーレーの法官より召喚さるゝ事になつた。一見行商の姿であつたが、此ハーレー

ーを見た事がないと言つた。それから再び歐人を訊問した所、其商人は能く似て居るが、其弟に違ひない、而して金剛石販賣商組合人となつて居ると云ふ事であるからそれに違ひないと云ふ事を云ひ初めた。

彼の辯護士なども頻に其事を主張する。

茲に於て法廷に出る前に謀を以て此弟を呼出し、此ハーレーをして何となく其樣子を探らしめて、果して此歐人より金剛石を買取つたか否やを確めやうとした。果して其弟に違ひないと云ふ事であるから警察官を以て醫人に立たしめた。併ながら事件は枝葉に渉つて來て、到底證を果し得ぬのみならず、既に四千法ほどの金を使つたが、遂に此事を斷念した、茲に於て予の物品を盜める料理人は重懲役一年及鞭撻五十に處せられ、又バントは六箇月の刑に、ハーレーは十五日の刑に處せられて、こゝに此事件は終局となつた。

（二）

予は最早此地に居る必要がない。遲々此地にも飽いて來たから、斷然此地を立去る決心で、物品器具は總て行李となし、天幕は纏んで、八頭の牛に牽かせて此を辭する事になつたが、長く居た土地であるから懇々たる情がないでもない。四十二箇月の久しい滯在は予をして此地を第二の故郷のやうな思ひを爲さしめたのである。予が植付けたる植物も今日は繁茂して何となく以前の主人に別れを惜むやうな有樣がある。

此コールスベルヒと云ふ地は渺茫たる原野で總て牧畜上の樹木を得るに且つた所であつたが、三年以來南方亞弗利加に金剛石を發堀した結果として非常なる地となつた。此間に於て幾千の金剛石を發見したかと云へば一億九千萬に上るに違ひない、今日と雖ども予が山發

するに際して三百九十八以上の有望なるものが殘つて居る。此原資はどの位であるかと云へば殆ど千二百萬法のものである。

某氏の如きは此國の下賤なる百姓であつたが、此金剛石發見よりして六千五百磅の資産を造つたと云ふ事である。

第二卷　黄金の原野

第一章

(一)

千八百七十五年二月八日、キンバーレーを出發した。既に前卷に於て述べたる如く、予は八頭の牛に車を曳かせて、オレンヂ自由國の首府なるブロームホンタインに向つたのである、ウオールドドベヤー市を過ぎて、此地に居住せる總督サウシー氏に訣別の意を表した。それより一時間ばかりと云ふのは殆ど闇黑なる原野を通つて、麗しき樹木の繁つて居る地に到着した。牛を車から解いて休む事になつた。

予の引連れたホッテントットの二人は枯草に火を放つて、それ〳〵食事等の用意を爲し、予は歐羅巴より持來れる麥酒を飲んで、附近を逍遙

じ恍惚として金剛石原野にあつた牛を追想した。夜に至つて非常な暴風雨が來て、今までの旱魃の爲に枯死せんとする草木も蘇生の時である。予は幸に此濕を受けた爲に愉快に旅行をする事が出來た。

プロームホンタインに至るまでは餘り道路の變化がない、キンバレーを距る二リューの所がオレンヂ自由國の境界である。此地に行けば實に平穏無事であつて、警察官あるにもあらず、嚴しき兵卒の佇立するあるにもあらず、何となく心持が爽かになる。二時間毎に必ず小さな小屋があつて、其處には必ず水溜が置いてあつて、旅行の便利を計つてある、泥の色は赤くして極めて沃土である。

キンバレーからプロームホンタインに至る途中にマッダーと云ふ河を渡るが、予は此河に入つて水浴を試みた。で十分泳いで將に岸に上らんとする時、予は一の黑い蛇に遭遇したが、此は可恐しい毒蛇で、噛み付く樣子であるから一散に逃げた。

プロームホンタインはキンバレーから百三十九吉羅米突の所にある、此間旅行すべき日程は五日間であるが、充分用意してあるから少しも苦痛を感じない。予の馬車は三千法の價のもので堅固に且つ便利であつて、旅行には最も適して居る。窓なども出來て居るし、其他化粧盥、小さな机、又道具を入れる箱などもあつて、殆ど我家を持ち運ぶやうな工合である。又食物の如きも更に缺ける所がない。珈琲、茶、チョコレート、燻肉、鹽漬、其他牡蠣の鹽漬、野菜、荷物等成な五日間の旅行には缺乏を告げない丈になつて居る。唯だ時々麵麭、牛乳等を所々に於て買ふ位のものである。如此蒼々たる樹木の原野を越えるのであるから食欲も隨つて昂進する。

此處に於てボエルス人の事に就て一言する必要があると考へる。予は前にボエルス人の事に就て少しく述べて置いたが、此人種は一種特別の人種で最も單純に、最も魯鈍に、寧ろ無情と云つても可い人間であ

る。容貌などは北亞米利加のパックスウーズ人に能く似て居るが性質は全然反對である。少くとも丈は六ピューはあるけれども物事をするに不活潑である、其代り忍耐力は強い。而して沈着にして先祖和蘭陀人の頑固なる氣性を承繼いて居る。其家に入つても何となく數百年以前の有樣があるのみならず、內部の有樣は如何にしても、それ丈の時間は現世より遲れて居る如く見える。部屋の中央に慣いた丸机には聖典などが飾られてあつて、日々の職業を了つて夜になると、家の主婦がそれを讀み聽かせる。此邊には經典及聖書と云ふものは必ず置かれてある。亞米利加のパックスウーズメンの內部には新聞などがあつて、其新聞は至る所に傳播して居るが、此ボエルス人の所には如此ものを見る事がない。毎朝職業に掛る前に唄を謠ひ、而して朝餐を喫して、然る後所勝をする。

牧師は最も尊敬されて居るから、此地に旅行する人は其へあてた紹介

狀を持つて往けば、到る處非常な厚遇を受けると云ふ有樣である。男子は前にも云ふ通り體格も宜し、容貌も魁偉美麗であつて彼のリユツアンヅニエー、オスターード、ワンエックの趣きを表はして居る。けれども教育が無い。彼等は一般に世の中とは離れて居て、主もに耕作牧畜などに從事して居る。婦人は何となく優美と云ふ點に於て缺けて居る。容貌などは餘程男子に似て居て更に教育と云ふものはない併し一家の妻としては最も適切なる技能だけは有つて居る。夫婦の間に先づ十二人位の小兒が生れる、此地に居るキビンヂユベール老ボエルス人は我が兒孫の數が二百九十人あると云ふ事で、一般に南方亞弗利加に於ては小兒の繁殖するのは實に夥しいのである。

最も嚴格なる習慣が行はれて、先づ第一外國人がボエルス人の門前に往けば、此家の主人が出て來て、特に招待せざる以上は、決して車より降りる事が出來ない。其ボエルス人の家に入れば、家族の手を最も丁寧

に握つて挨拶をしなければならぬ。歸るにも其通りである。それから萬一泊つた時分には、飲食料と云ふものは必ず拂はなければならぬ。又牛馬の飼料などもそれ〳〵心付をしなければならぬのである。

彼等の最も心を慰めるのは互ひに訪問を爲合ふ事で隨分隔離して居る所を訪ねる事があるが、其時は先づ煙草を喫し、時々燒酎を飲み、天氣の好惡を述べ、我牧畜の有樣などを故も眞地目らしく話す、而して是等の者は一年に二三度一堂に會してサントシエーヌ(神)を祭る爲に最も近い村に往つて、先づ一週間位は其地に止るのであるから、それ〳〵車を牛に曳かせて、其祀の爲に奔走するのである。此間は原野は天幕を以て掩はれ、實に奇觀を呈する、のみならず商賣人は種々の物品を賣物いで居る。若い娘等は此時を機として自分の衣服などを購ひ帽子などを求めて、各々華美を競はうとする。又若き男等は此時を利用して我が好配遇を求めやうとするが、此サントシエーヌ(神)は即ち彼等の出

靈の大神である。

ボエルヌ人は己が居住せる近傍に英國人の住ふ事を悦ばない、それ故に自分等の住へる土地に餘り多くの英國人が居れば、直ちに己れの所有物を賣拂つて、他に立去つて了ふ。如此風であるから英國元祖と和蘭陀元祖との間に非常な區別が出來て了ふ。概言すれば英國人は先づ中心點を占め、和蘭陀人は田舍の方を占むる譯である。

（二）

千七百九十五年に英國が此喜望峰殖民地を造つて以來、放任政略を取つて、千八百三十四年になつて同令の撤去と云ふやうな事をしたのである。其政略が餘り酷に過ぎて殆ど安然此英國の殖民地に居る事が出來ない爲に、和蘭陀人の多くの耕作者などは、默類などを引連れ、オレンヂ河の他岸に往き、又はナタールの方に立去つて了つた。彼等は銃

を以て原野を跋渉して禽獸などを捕へるやうな事を爲し、次第に其勇氣も增して來て、遂に一國を形くるに至つたのである。英國人は是れ等の人種を呼んで單にボエルスと呼ぶやうになつた。ボエルスと云ふ言葉は田舍者と云ふことである。如此にして三箇の國が出來上つた。即ちオレンヂ自由國、ナタール、虎坡共和國此三つである、然るにナタール共和國は、千八百四十五年英國の爲に撤去されて了つた、又引續いてオレンヂ自由國も同じ有樣になつて千八百五十四年までは英國の支配に屬して居つたが、此國民は英國の支配を受くるを好まず、遂に干戈を弄して、其勇氣が沮まない爲に遂に英國も之を放拋する決心を取つて、同年の二月二十三日英國との間に一の契約が成立つて、此國は獨立を公言することになつた。

然るに虎坡共和國は外交上の契約の爲千八百五十四年以來自治政治を布告することになつた、それで此自由國は一時假政府を設けて、而

して各州の才傑を撰んでホフマン氏を議長とし茲に人民一致の投票に依つて、共和國の基礎を固めた、其時に現はれた大統領はポスポッフであつて五年間の年限を無事に務めたが、內には行政の機關を完成し又外には土民の酋長等と交渉し、又は境界問題等を決定した、然るに此大統領の職務を去る前に最も有名なる事件が起つた、それは彼のバスートルとの戰であつたが其戰は千八百五十八年に無事に平和を結ぶ事になつた。

ポスポッフに次いでプレトリユースと云ふ人が大統領に撰ばれた、此人の時代にグリツカランドの酋長なるアダムロックはオレンヂ自由國に降參をして、自分の有つて居る地面を引退いた、此者が退いたる國こそ金剛石原野と云ふ名を得た地である。

第三の大統領は辯護士のブランと云ふ人であつて、再選せられた人である、此人は亞弗利加に生れて、倫敦などに往つて學問を爲し、最も法理

に明るくして明確なる頭腦を有つて居る人である、南方亞弗利加なる自由國を監督し支配する事には最も長けて居た。

當時此喜望峰の和蘭陀人などは其地を去つて此地に來る者次第に數を增し、現今では彼の獨逸聯邦のペビエール、ウルランヴルヒ、バードなどの各州に平均する位の人口がある、餘り人家が稠密になるから、虎坡の方へ移住する者が多い、愈々人口が殖へるから十數年も經たなら亞弗利加の中集點になるかも知れない。殊に內部に往くと又ガミなどより湖水があり草木などにも富んで居るから、移住には最も適して居る。

併し此所に特筆すべきは此亞弗利加の大陸に向つて最も農業を興さしめたのは和蘭陀人の力である。是等の爲にナタールをツールに取上げて了ひ、而して一種の共和國を造つて首府をピータマリツツルヒに設けた。此ボエルス人の血統は前にも述べた通り和蘭陀人であるが純粹なのではない。或は佛蘭西人も獨逸人もあるし其他種

々なる人種が混つて居る。此國の言語はおもに和蘭陀語の變化したものである。

（三）

話は前に戻つてキンベーレーよりプロームホンタインに往く事に就て一言して置かなければならぬ。或日の事百姓家に入つて牛乳を買はふとした所、其家の隅に最も見苦しき、何となく不愉快なる有樣の鶏のやうなものがある。鼠色の羊の毛を集めたやうなもので、中から鷲の如き羽のない鳥が首を出して居る。百姓の說明を聞くと、是こそ駝鳥の兒であると云ふ事であつた。今寒氣に向つて來たから、此中に隱れて縮まつてゐるのである。

予が訪ふた最後の耕作場の亞なるものはベーヌ氏の耕作場。これは南方亞弗利加に於ては有名なる物の一つである、此地では千八百六十

年に空前絶後の大獵を催ふしたと云ふ話を聞いて居つたが實際三千ばかりの鳥獸を殺したと云ふ事である。北種類はセブラ、アンチロップ、駝鳥の如きものが多い、北獵の仕方は數里の間輪攻をして追ひ込んで來たのである。此獲物を運ぶにも大層手間が掛つたと云ふ事であるが、今日は如此有樣を見る事は出來ない。今麒麟だとか、又はセブラとか云ふ物を捉えるには虎城のリンポ、サンベース河の奥まで往かなければならぬ。此處を立つてから終日此原野を通つて往く時にアンチロップの群を爲して居るのを見た。

二月廿三日オレンヂ自由國の首府なるブロームホンタインに到着して、獨逸の宿舍に泊る事になつた。引連れた三人の僕は其傍に天幕を張つて之に寐る事になつた、此ブロームホンタインは奇麗な土地であつて、山などもあるし又水なども流れて居る所である。其他此町を散歩して見ると寺院などもあつて佛蘭西の英吉利のもある。

二月二十三日はオレンヂ自由國の建國祭で、予も其宴席に招待されたが、其席でホッテントット、カーフルの娘等の踊りを見た。

第二章

（一）

オレンヂ自由國は三千七百リユー餘、千八百七十五年白人種六萬人及他の黑人種其他雜種等二萬五千人ばかりであつた。十三の市村六七千の農區に區劃されて居る。元一般に漂民のみであつて定住者と云ふのはなかつた。此邊はカーフル、コロノー、ヒツシユマンなどが往來をする一の街路に過ぎなかつたが、千八百十六年より千八百二十年に至る間にグリツカランドの者共がアドロックと云ふ酋長に指揮されて、遂に此國を占有することになつた。此時代からクーフのボエルス人は旱魃の爲にオレンヂ河畔に侵入して來て、草木の繁茂する原野に牧畜を爲して己が生活を豬ならしめやうとしたのが今日の自由國を形つた根原である。次第々々に此人民が諸所方々に散じてリエツトと稱するオレンヂ河畔に居を移し遂にグリツカランド州まで屯集をして偖こそ此若き共和國が生れたのである。

此國は一般に曠原であつて、ドラゴン山は東方に聳え西北に延びてツール、オレンヂ河畔にまで達して居る。クール及オレンヂの大河は此邊の地を濕す無限の寶庫で、此邊には百花爛熳と咲き亂れ樹木鬱蒼と繁つて居る。此自由國の東の部分はドラゴン又はモンターギユ（白山）ブランシユ（白山）と稱する山があつてバストートランドの英國占領地は此傍にあつて南方亞弗利加の瑞西とも云ふべき、世界に於ける美土を形くつて居て、谿谷瀑布などの最も賞すべきものが澤山ある、此最も高き所は海面を拔く事九千ピエー、或は一萬ピエーである。此邊の荒原に生ずる草は殊に東南の部分に於ては其丈人の體よりも高い。最も好其なる飼料に適して居る。年の或時期に於ては幾十萬のアンチロロップの群を爲して、此美しき原野に入來るのである。或

時は此國の住民が此原野に火を放つて枯草などを燒盡すことがある。是は最も繁生上に非常な効力があるのであるが、其ために若い樹木までも燒き盡すので、時としては自由國の全部が樹木のない燒野となつて了ふ。西部の方は如斯草は餘り繁茂しない代りに羊を飼ふに適して居る。山の部分に於ては野生の草木などが繁茂して居て、護謨柳などに最も適して居る。庭園には梨、林檎、桃、柘榴などがある。併ながら此國の最も特有の物産と云ふのはグリッカランドに於けると等しく荆棘のミモザーと稱へるものである。此葉はラッン(獣類)の最も好む所のものであつて、其は花咲き、歐羅巴などに於ては、見られざる好風景を呈する。其他の時期に於ては青き葉が繁るのであるが何となく淋しくて稱する程の事はない。

此オレンヂ自由國に於ける重なる産業は牧畜である。農業は僅に制限されたる部分にあるのみであつて、先づ東南の方が其多きを占めて

居る。此九千五百アルパルの廣き地に時としては三千頭以上の畜類を見るのである。尙ほ此上にも最も大なる牧畜場を有して居る者などもあり山がある。農業に適さない理由は、一般に水と云ふものが充分でない羊の毛は燒んであつて、千八百七十五年の統計に依ると六萬パルの羊毛を輸出したさうである。一パルは七十五頭より百五十頭の毛を集めたものである。で此羊は數を概算したならば、六百萬頭位はあらう。此外最も多いのが駝鳥の毛で、又家禽類が多い。人口一人に付いて殆ど百七十の家禽を養つて居る。是等も其毛を取つて、之を輸出する。此飼養法も他の所とは違つて居つて、其收益は非常なものである。殊に駝鳥を養つて其毛を英國へ輸出する額は千萬以上の額に上つて居る。此駝鳥の毛には種々種類があつて、又價にも高下がある。で駝鳥を馴らすのは最も困難であるが、兒飼にすると、能く人に馴れる。或日の事予が睡つてゐる身邊に不い物が觸るゝので目を開いて見る

と、小さい駝鳥が我部屋に入つて來たのであつた。

以前此地には獅子などが居たさうであるが、今日は東方の山間に退いて、殆ど其影を見ない。其他種々の動物が居る。隨分馬などに害を與へるやうな事もある。若し猛獸が來て我が飼つて居る獸類を害された時分にはボエルス人は其獸の有樣を廣告して、それを狩り初める。又猛獸の爲にあらずして我が飼へる所の牛馬等が失つた時分にも直ちに之を廣告するのである。

此カーフル人は獸類の容貌などを既明すに最も詳細なる言葉を有つて居る。先づ第一自分の飼養せるものが失つた時分には、此國に居る老年のカーフル人又は老年のホッテントット人を呼んで之に占卜をさせるのである。此占卜をドロスと呼ぶが、何か呪文めいた事を唱へて猿、蛇などの骨を十二ばかりも地に投げて所謂をする。如此方法を以て十中の七八は此占卜者の云ふ通り獸類が現はれて來る、實に其奇なるには驚く事が深山ある。予の如きもキンバーレーに居つた時分に二の驢馬を失つたから其の就の方向に居るかを知らうとして數十人のカーフル人を以て諸所方々を探さしたが解らない。遂に占卜者に人を送つて何れの方向に在るやを尋ね、然る後檢査したるに果して占卜者の云つた方向から現はれて來た。

（二）

オレンヂ自由國に於て最も利益になるのは、店を開く事で、店と云へば、あるとあらゆる物品を備へおかねばならぬ。所謂唐物屋も荒物屋も此店一でしなければならぬ。而して價を非常に高く賣る、ボエルス人は一向其價に關しないから店を持つて居るものは僅な間に巨萬の富を博し、又此國の百姓等は駝鳥の毛を持來つて安く賣る爲に、店を持つて居る者は二重の利益を得る事が出來る、此中には猶太人が多いが、其

中でも獨逸の猶太人は最も多いやうに見受られる。

運搬に不都合な所であつて、殊に英國の殖民地を通過しなければならぬから、隨つて高い稅を課せらるゝ、それ故に價の高いのも實際に於ては無理もない話である、今にプロームホンタインと海岸と連絡する鐵道が出來たならば、此邊の物價も變動を來すに違ひない、併し此鐵道といつても隨分困難で、是より一年や二年で出來るものではない。殊に山なども深山あるから。此國の行政機關は如何であるかといふと極く單純なもので、立法權は人民から四年目に選ばれて出る五十二人の議員の手に任してある、是等の議員は年に一度つゝ集會するのであつて、時としては緊急事件の爲に臨時議會を開く事がある、而して行政權は大統領が掌握して居る、是も人民から五年の年期で選ばれるが、再選は無論許されてある。大統領の交迭に就ては亞米利加のやうに政府全體の變化と云ふものはない、大統領の下には內閣と云ふやうなもの

がある、是は行政參事會とも云ふべきものであつて、國務大臣が其役人である、尙此外に最も有力なる最も名譽ある者三人を此席に議員として列席せしめる、是等は二年毎に交迭する事になつて居るが再選は許されてある、各州の長はランドロストと呼んで行政の機關を握つて居る。又ランドクラクと云ふものが添つて居る是は副知事である。其他行政司法上の命令を奉じて之を行ふ所の役人等がある、即ち警視總監もあれば監獄長官もある、其他警察官巡査なども澤山あるが、是には白人種も黑人種も混つて居る。

一州をワードと云ふものに分つてある、即ち一の選擧區と云ふやうなものであつて、其選擧區はヘエルドロルチーと云ふのが此長となつて司法權を執行して居る、又邪の時分には軍權を握つて居る、此ワードと云ふのが集つて司法官を選んで之を州の長とする、若も戰が初つて時分には行政官と司法官とが集つて總督と云ふものを選ぶ、是が共和國

の大將軍であつて大統領の旨を奉じて動くのである。公民の資格を有する者は第一自由國に生れたる白人種、第二、一年間此國に居住して百五十磅以上の不動産を有する者、第三此地に住居した者。

司法上の事に關して一言すれば、第一、ランドロストの法廷、是は刑事上の法廷であつて此處に於て罰せらるゝものは三箇月の禁錮と二十五の鞭刑を以て最重のものとしてある、第二ランドロスヒームヲ、チンカッフの法廷、是は四箇月以上の禁錮に三十の鞭刑、千法より二千法の罰金を課す事で出來る、第三、シューの法廷、是は前の裁判所に於て其裁判に服せず控訴したる者を裁判する所である、第四、最高等院と云ふべきものであつてプローむホンタインは年二回或は一回設けらるゝものである、是は裁判長及ランドロストの法廷より選ばれたる陪審官其他檢事等が列席する。

寺院の制度は種々あるが茲に喋々する必要はないと考へる、唯だ日曜

日は各寺院に於て打鳴す鐘は殆ど耳を聾せんばかりであるが昔は各寺院に依つて違ふ。或は哀しきもあれば或は愉快のもある。之を聞き分けると隨分面白い。

教育は教育長官とも云ふべきものがあつて、プロームホンタインには中學校が設けられ主もに英語を修練する事になつて居る、又英國の寺院は商等學校と云ふやうなものを設立して居る、其他貴族女學校も此地に設立されてある。

第三章

(一)

千八百七十五年三月十四日此地を立つてタバヌチューと呼ぶ所に旅行した。此はバロンゾマロカ王の居住地であつて、人口は殆ど二萬五千人オレンヂ自由國の中央に位する島の如き國である。併し獨立國で保護國と云ふ名の下にある、此國は長さ八十吉羅米突廣さ六十吉羅米突に過ぎない、故に餘り大きくない帝國であるのは無論である。

然るに以前ボエルス人とバストーと戰つた時分、二千人の戰士を送つたと云ふ事實がある。平穏なる國で、和氣藹々として居る。

プロームホンタインよりタバヌチューに往く道は實に樂土に往く趣きがある。此マロカ國に入る國境になると、其處には黑奴が居て旅行券を檢査する、其邊は山で、高きよりプロームホンタインの町が雲煙糢

糊の間に縷縷して居るのを見受ける。愈々進むに隨つて景色は彌々好くなる、此町に着いて天幕などを張つて、それ〳〵泊りの用意をして、市街に散歩を試みた。偶々涙手な着物を着た者が遙かの高丘から降りて來るのを見たが、段々近いて見ると、それは此地の舞姫の群であつた。で如何にも面白い手樣をして踊つて來るのである。實に愉快氣である。若い男と若い女のみで、中には小兒なども居る。着物は歐羅巴風にあらず又土民の風にもあらず一種の折衷風で至極優美と別つて可い。併し胴の周圍には殆ど片布を纏はず、唯だ腰の周圍に着物を着けて居るのみで、頭には種々の帽子を被つて居る、此群の中には赤い青い日傘を持つて居るのもある。で、それをしなやかに振廻すのである。是等の群は予の居るのを見て、如何にも禮義正しく予の方に進んで來て、其中富豪の家に招待した。

然るに予が入ると此土民等は好奇心に驅られて、庭内に入つて來やう

としたが二百人を限つて入れた。種々食物が用意してあつて、招かれた者は各々低い椅子の如きものに腰を掛け、其他は庭上に坐つて、而して卵や又は肉を食つてゐる。然る後最も好味の珈琲を饗したが、其味は今日まで忘れない。それから予の爲に主人が此國の言葉に譯した英國歌を唱つた。

群集は總て起立して如何にも嚴肅にそれを聞取つた。後で段々聞いて見ると、是が婚禮であつたのである。

予は此家の主人に暇乞をして此處を出ると又面白いものを見た。其處には幾十人の少女が垣に寄つて此中の樣子を見て居る。彼等は歐羅巴の着物を着ない、眞のカーフルの着物であるが一般に裸躰であつて、僅に腰に片布を卷いて居るのみである、併し腕や首には種々な飾物を着けて居る。

餘り面白いので此少女等の傍に往つて、五志を出して、我天幕の傍に來て踊つてくれろと頼んだ。彼等は驚いた風で金を返して了つた。幸に其處に英吉利人が居たので、予の思ふ所を述べた。漸くにして彼等は予の意を解して半時間の後、我天幕の所に來ると云ふ事を約した、果して少女等は遲つて來て我が天幕の前に於て到底歐羅巴に於て見る能はざるパレーを演じた。歐羅巴でならば非常な金額を費さなければ出來ぬ踊である予は僅か二十三の片布を其中の熱心なのに贈つて、それで事が濟んだのである。て所持の物品などを見せた所、彼等は非常に悦んだ、其内最も感じたのは寫眞である、其他鏡とか、戒は化粧道具などは彼等が嘆賞措く能はざる所であつた。

如此して漸く時が過き、予は彼等に暇乞をして眠りに就いた、眠つても尚彼等の愉快なる歌の聲は耳邊に響いて居た。

翌日何やら騒がしき聲に驚かされて睡より覺めた。予は起きて車の窓から見ると、我窓下には黒奴の婦人とも云ふべき者が來て盛に予に向つて嘆願する如き樣子である。予の連れてゐたるホッテントットのイザックに其意を問はしめた所、彼は牛糞を請求するのである、蓋し肥料が少ないので、此牛糞が穀物に宜いと云ふ事から之を請求したのである、予は此請を容れた所、一の牛が脱糞すれば互に爭合ひ、而して其處は殆ど地まで堀つて其牛糞を取去るのである、是より日々此牛の周圍には常に黒女が取卷いて居つたが實に一種の奇觀と云はなければならぬ此村の家は一体に低くして是と云ふ程のとはない。然し其内部を見ると客間、料理場、寢室總て具つて居て、實に清潔なものである。彼等は平穏な人民で、ゆゑに内部の喧嘩など見た事はない。彼等は宗

（二）

教に熱心で、毎朝六時には必ず寺院に往き而して僧正等の説教を聞くのである。僧正はダヒエルと云ふ英吉利の牧師で、予は此人と親交になつたから、其紹介で マロカの王に謁見を願んだ所、僧正は其意を諾して、翌朝十時に謁見を許された。

此國王の宮廷は、黒塗の大きな宮殿であつて、市街の中央に位して居るが、其大廣間には二百人以上の人を入れる事が出來る。國王は如何にも穏和なる容貌の人で、予が謁見をしたる時は樞密院顧問官とも云ふべき者を引連れて、予と暫く談話を試みた。彼は歐羅巴風の着物を着てゐる。暫く談話の後女王に紹介しやうといつた。女王は毛の着物を着て、如何にも國母と云ふ姿がある。女等も出て來た。歐羅巴風の禮裳に嫻つてゐるが、着物は半歐羅巴半カーフルであつた中でも次女は珠の如き愛らしい兒で、予は曾て通般輝く眼を見た事がない。

予は此地に滞在して居る中に、熱病に悩つた、加之其病中に大雨があつ

て、予の天幕の如きは、洪水の中央に入つて了つた。

（三）

パストーランドは南方亞非利加の最も奇怪なる部分であつて、四方山を以て掩はれ、風俗も野蠻にして、文明の空氣と云ふものは殆ど此地に吹かぬかの感がある。北代り無限の財産を有つて居る、即ち此國は立派な水晶を以て掩はれ、又金は湧くが如く地から出て來る。然しパストーランドの人民は歐羅巴人に對して金の在所を秘してゐる。又植物としては赤い桔梗が生へて居るが、倫敦などに此花を持つて往けば僅か一輪で二十五法の價があると云ふ事であつた。

今より四十年前は食人種の國であつて、千八百七十三年の頃まで其者は殘つて居た。此者は鬼と名けて總ての者より恐怖されて居た。其死後居住を檢して見たところ幾千の人骨が出て來たと云ふ話である。

此者は常に山腹の岩窟の中に住つて力飽くまで強く、若旅行者を見る時は捕へ來つて細かに切つて食するのである。食べるといつても殘る所なく喰へる譯ではない、先づ腕足等を喰べる位で其他の部分は捨てゝ了ふのである。之を恐れて決して此者を襲はない。彼は自由自在に兇行を逞うする事が出來た。

千八百六十七年より千八百六十七年に白人は此猛惡な者が生きて居る事を知つて、遂に之を捕へて幽囚したが、唯一人バストーランドの人間は其役目に當る者がない、此者に一の妻がある、容貌獰猛人間とは思はれぬ位である。是も夫と同樣食人を事として居つた、今に至るまで其岩窟を食人村と云つて、プレンレー氏は數年前此地を檢したと云ふ事である。

バストーランドには蛇が非常に多い、土民は甚しく之を恐れて其身中には殺された人の魂が籠つて居ると云ふので若之を殺せば直ちに仇

が報つて死ぬと云つて殆ど神の如くに思つて居る。或日一のカーフル人が、其蛇に噛まれたが之を殺さないで此國に行はれて居る療治をして、其蛇は逃して了つたといふ事である。

最も激しい游蛇は長さ四ピエー程で、鰻位である。決して前へ進まず、後ろに退くのが其性であるが、人を襲はんとする時分には身を擡げて、非常な音をさせる、色は蒼白にして腹部は純白頭は黄色である。其他首輪のある蛇などが居る、長きは三十ピエーより四十ピエーに渉る大きさのものがある、是等の蛇は人の眼を刺して盲目にする。又輪蛇と稱するものが居るが、是は段々少なくなつて來て、今日は見る事がない。此名は人を襲はんとする時は體を輪の如くするから付けたのである。是等の害を免れんとするには當然方向を變へて、彼の飛付くを避けるより外に策はない。

其他柔順なる蛇は隨分多く居るが中には小兒の友と云ふ蛇がある、そ

れは小兒が此奇麗なのを見て之を捕へやうとする、遂に小兒の友と云ふ名を下したのである。

其他種々ある、最も甚いものは乳蛇であつて、黑色を帶び、首より尾に白い筋がある。予がブロームホンタインに居た時分、一人の兵隊が此蛇に遭遇したさうであるが、蛇は人を見るや否や直ちに逃駈けて來たが、漸くにして其危險を免れた。翌日或人が三頭の犬を連れて同じく此蛇に遭遇したが、犬は此蛇を噛み殺したと云ふ事である。又兩頭の蛇が居るが是は最も毒が劇しい。此蛇に就ては動物學者が研究をしたと云ふ事である、又足のある蛇がある。英國の博士クーパーは倫敦博物館の爲に種々蒐集したが、此兩頭の蛇をも得たさうである。海蛇に噛れた時分の眞藥は何であるかと云へば、卵の蛋白質であると云ふ事である。

若蛇に噛まれたならば蛋白質を飲るか、或は其を水で飲むかすれば癒

る。

或日フヒンレー氏が此海蛇に就て面白い話をした。

それは或畑の持主が死んで其家を賣る事になつた、ボエルス人が之を買つたが其家に移つて一週間ばかりで死んで了つた。第三者に賣つた所、是も亦た十五日ばかりで死んで了つた、實に奇怪千萬であると云つて驚いて居たが、又之を第四者に賣つた、此者は非常に壯健な人であつたのに、僅か四日で死んだ、茲に於て誰も買ふ者がない、遂に或若い百姓が安い價で買取つたが其人は今も健康にして活きて居る、それはどう云ふ譯であるかと云へば、此家を買ふや否や直ちに家を壞して充分探索してみたところ一の海蛇が居て來る人來る人を噛殺したのである。

此カーフル人の上流社會に於て一の病人が出來ると直に牛を犧牲に供して其血を取り、而して其肉は親族知人等に分ける、それから若い娘達を山に遣つて樹欖などを取らせる、之を來て居る客人に分けて厮を

する。

尙此外パストーには種々の魔法使が居るが、催眠術を以て人を察かすことは屢々である。

第五章

（一）

クパーヌチユーに十五日間愉快に日を暮して是からレヂーンランドに向つて出發したが、此世人が賞讃する所の村で元パストーランドに屬して居た。パストーランドは海面を拔く凡六千より七千の高さに位する地で、氣候も宜しく人民も多少獰猛と云ふ噂もあつたが、人の話す程ではなくして溫和である、人口は最も多くして土民中にも此文明開化の空氣は充分に侵入して居る。農業なども隨分進んで居るやうな有樣である。衣服も在來の衣服を捨てゝ歐羅巴風の着物を着家も石或は煉瓦を以て造つてあるが生活の程度は低い。初めの內は寢中の閑日月に浴すことが出來たが、文明の潮が此處に入つて來てからは、金錢を尊び、隨つて多少風俗上の腐敗を來したのである。

毎年マゼルヌと稱する地に人民公會が開ける。之には英國の役人も列席し、其他牧師或は各州の酋長とも各々發言權を有つて居る。千八百七十四年八月二日の統計に依ると、殆ど五千餘の土民が集つた。此土民中の最も大なるものはモラボー、レドツーマツファーなどで最も勢力を占めて居つた。議長は行政長官が其任に當るのである。

予は彌々出發する事になつたが、道路泥濘深くして車を行る事が出來ぬ。マロカを出立して此地に入るには空しく數時間を費したのである。レデーブランドは自由國の最も豐穣な地で、植物は非常に繁茂して居る。不幸にして予の車が壞れて、持來た荷物は殆ど水に浸されて了つた。連れて來た歌人の僕は返して了ひ、僅に二人のホッテントットを連れて居たが、是とても亂暴者であつて殆ど手が附けられない。予は一の農區に宿したが、其處は元佛蘭西人の母、の一人の若いホエルス人に屬して居るのである。予が此土地に着いた時分は丁度祭禮で、

バイオリンを彈くやら、ギタールを調べるやら、舞踏會の催があつて婦人なども澤山あた。

車の修繕が出來たから翌日行程に上つた。實に千八百七十五年四月一日である。此邊は山澤山で絶景がある。瑞西に髣髴たる所が見える。牧畜業も盛で、諸所に羊又は牛の群を爲して居るのを見た。住民等は實に平穏であつて殆ど世界に如何なる事があるかを知らず、暢然な顏をしてゐる。

（二）

四月二日、愈々景色は絶景になつて來る。此日、予はメカリトリンクに到着する積りで道を急いだ所、其メカトリンクと云ふ所は一の立派な家があつて充分に旅情を慰める事が出來ると云ふので進むに隨つて其家は山の影から現はれて來た。此家の近傍は草木繁茂實に樂土に

入る心持である。家に近くに隨つて池などが見える。家は併倡の居る所であるが、驚いたのは、迎ひに出て來た者は併衣を着ず普通の着物を着て居た事である。

予が金剛石の原野に於て知つたラドロッフ氏の如きは、一年前婚禮をして六千磅を拂つて此農區を買つて而して寺院を建てゝ自分の居る所として愉快なる日月を送つて居ると云ふ話である。家に入つて見ると山水の景色は勿論の事、之に添つた樹木の美と云つたら名狀すべからずである、ラドロッフ氏は予を其妻に紹介して晩餐を饗應したが、實に數年間の鬱を此一晩に散ずる事が出來た。

一夜は此に明したのである。睡りに就く前に窓を開けて夜の景色を見つゝ夜露の聲潺流の囁きに耳を傾けた。幸ひ此處に大工が居て予の車を直して呉れたので、翌日からは安心に旅行する事が出來るやうになつた。

四月三日予はラドロッフの家を立つてヘドレームに向つて出發した。パストランドの高山は右方に聳える、トラケンベルヒの鎖脈は左方に聳えて居るのを見た。宛もピレス山がアルプス山を望むやうな心地がした。ウィットベルヒの諸山は連綿として實際に現はれ、其景色の愉快なる、知らず識らず道を過むことが出來た。

翌日一種の奇觀に遭遇したのは、パストランドの若い女の群に會つた事で、彼等は身に奇麗な織物をした片布を着けて首環を飾つてゐるが裸躰である。予は車を其傍に遣つて多少の金を與へ、師を要求した所彼は承諾して直ちに一種のパレーを演り初めた。此師は頗る優美なもので、歐羅巴人に見せたならば大に喝賞するに違ひない。

（三）

ヘドレームに近くに隨つて牛は疲れて、病に罹りさうな工合である。噂に依れば此邊には寒冒峰殖民地邊より一種の流行病が侵入して是が爲に幾千の牛馬が斃れると云ふ事であつた。予が通る道なども總て是等の死骸を以て掩はれて居た。であるから如何なる病にかゝらうも知れぬと心配をして充分注意をして居た。

四月六日ウイットベルヒの山嶺に沿ふて進んだが非と小兒の群に遭遇した。予は彼等をして師らしめたが、埃及古代の師に能く似て居ると感じた。翌々日即ち四月四日ベトレームに到着したが、此處には一の部屋もない、餘儀なく一晩過むやうになつた、其理由と云ふものは此ヘトレームにはボエルス人の宗教上の大禮があつて幾千人の人間が入つて來て殆ど空屋がないやうになつて了つたのである。

十二日ハリースミスに到着したが此處は自由國とトランスバール國との國境にある町であつて貿易上必要な地である、ドラケンベルヒの山を離るゝ事九リユーにして氣候は好良、健康に適して居るが、冬は寒いと云ふ事である。直ちにカラルに着いたが入る事が出來ない。幸にして市長への紹介狀を持つて居たから同氏を頼んで官舍の一部分を借り、滯在する事一週間、しば〳〵此市街を見物した。

第六章

（一）

ハリスミスを出發してナタール州に向つたが、此は熱帶に位する美國であつて、昔て樂土の稱號を擅にして居る所であるから、此地遊覽の念は實に燃ゆる如くであつた。旅行者の紀行に依れば、一度此熱帶の地方を遊歷すれば再び其地を蹈まうと思ふ念の絶ゆることがないと云ふ位である。ハリスミスから道は次第に上るやうになるが、最初の日、午後、予は收稅署の前を通つて三法の稅を拂はせられた。それは亞弗利加に於て遭遇した初めの役所である。

其晩予は寂寞たる原野に位せる一のホテルに到着したが食堂などは廣く器具も揃つて居るが人の氣合がしない。主人は數箇月前から不在であるが、此地には盜賊の憂がないのみならず、盜賊と云ふ言葉さへも

ポンドーの近傍

殆ど知らぬ位である。器具物品の如きも放擲して何處へか立去つたと云ふ事であるが主人が歸つて來ても一物一品たりとも失つて居るやうな事はない。予は翌朝ドラケンベルヒの山を越えたが、是は南方亞弗利加の高山であつて、海面を拔く事五千四百ピエー、一歩は一歩毎に絶景を極めて來る。雲は脚下に起り殆ど空中旅行をして居るやうの感がある。霧が晴れると皚々たる岩石の山は緑に包まれて眼前に現はれ、日光は其光を放つて一種のパノラマを呈する。

漸く頂上に達した。それからナタール州の方に向つて降りるのであるが、寒氣の酷烈骨身に徹する位である。山を降つて以來殆ど見るべき景色はない。人跡も殆ど稀である。唯だ僅かな農家が諸所に櫛級する位のものであつたが、漸く進むに隨つて地は豐穣になり、段々ナタール州の眞價を現はして來る。砂糖綿珈琲などは非常に繁殖して居る。夏は農業が盛で、時を選ばず

して種子を蒔き、亦た時を撰ばずして收穫する事も出來る。人口は一萬八千の白人種と四十萬の黑人種がある。二十三日の夜ホテルに到着したが、此は或る英人夫婦の監督の下にあつて、それに一人の妹があるが、予は是等の人を相手に愉快な一夜を過ずことが出來た。

二十四日途中に於て二人のツールー人に遭遇したが、皆な武裝をして居て、中には竹槍盾などを持つて、如何にも強さうである。顏容は怜悧であつて、豹の皮などを手に持つて居る。頭には鷲の羽を着けて傲然と行つて來たが、我々に遭遇すると挨拶をする。

是からナタールを通つてツールー人を尋ねターバンに出でサンシバルから歐洲に歸る事になつた。

虎坡の事に就ては倘詳細なる記事を作る積りであるから今日はオレンヂ自由國及其他虎坡の境界の事に就て筆を執つたのである。

其積りで讀まれむ事を望むのである。

金剛石の原野 終

明治三十三年六月十四日印刷
同　年六月十七日發行

金剛石の原野
實價金參拾錢

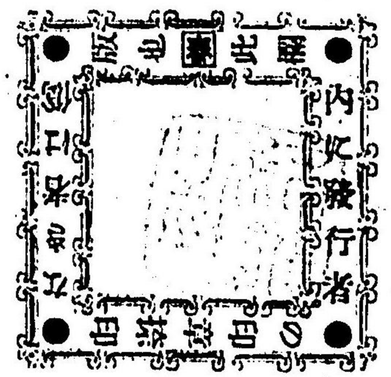
著者　長田忠一
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田むゑ
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

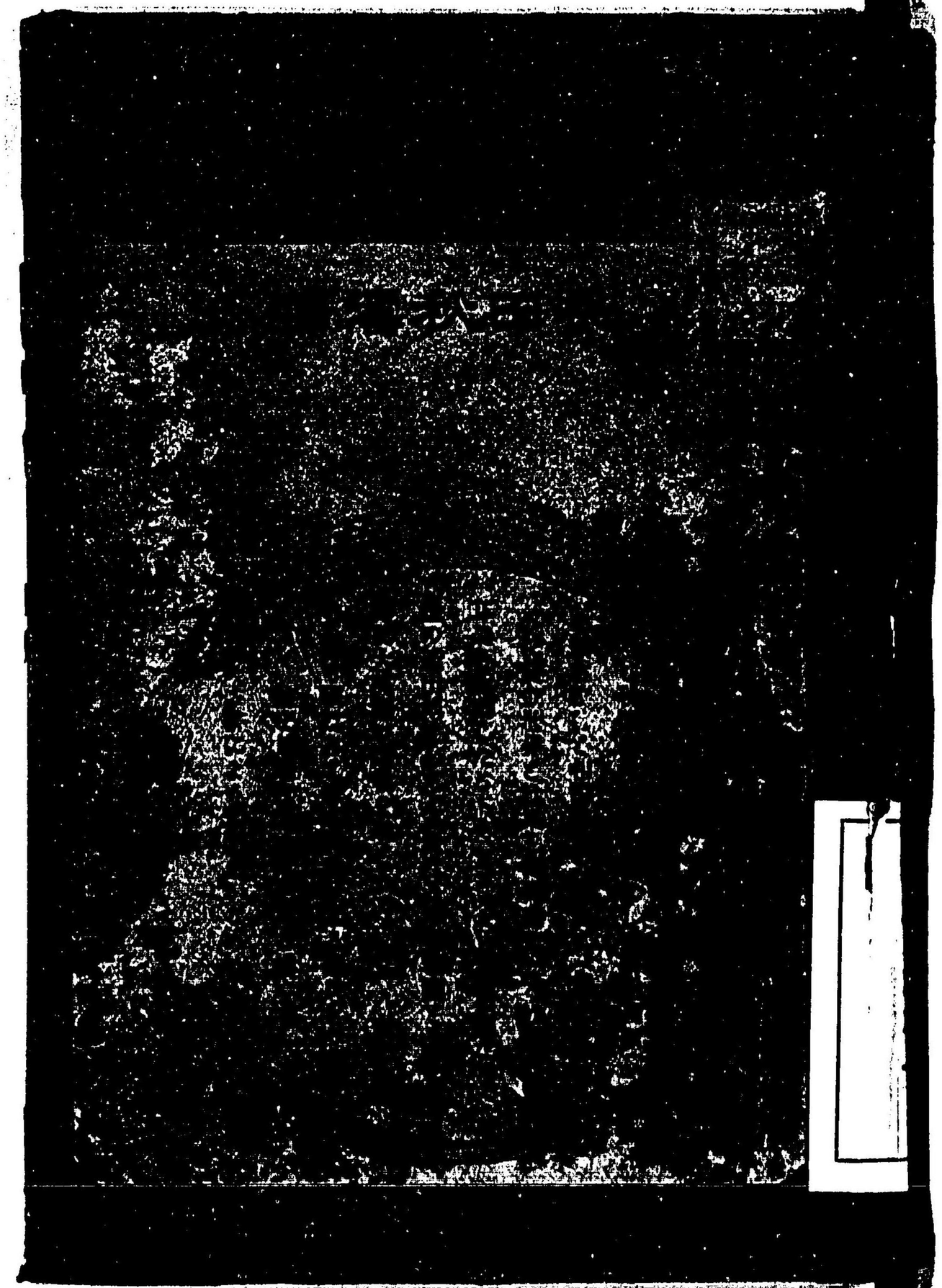
印刷者　青木弘
東京市日本橋區通四丁目角

發行所　春陽堂
電話本局五拾壹番

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
（電話新橋十八番）



82
224



021937-000-4

82-224

金剛石の原野

長田　秋涛（忠一）／訳述

M33

ADA-0173